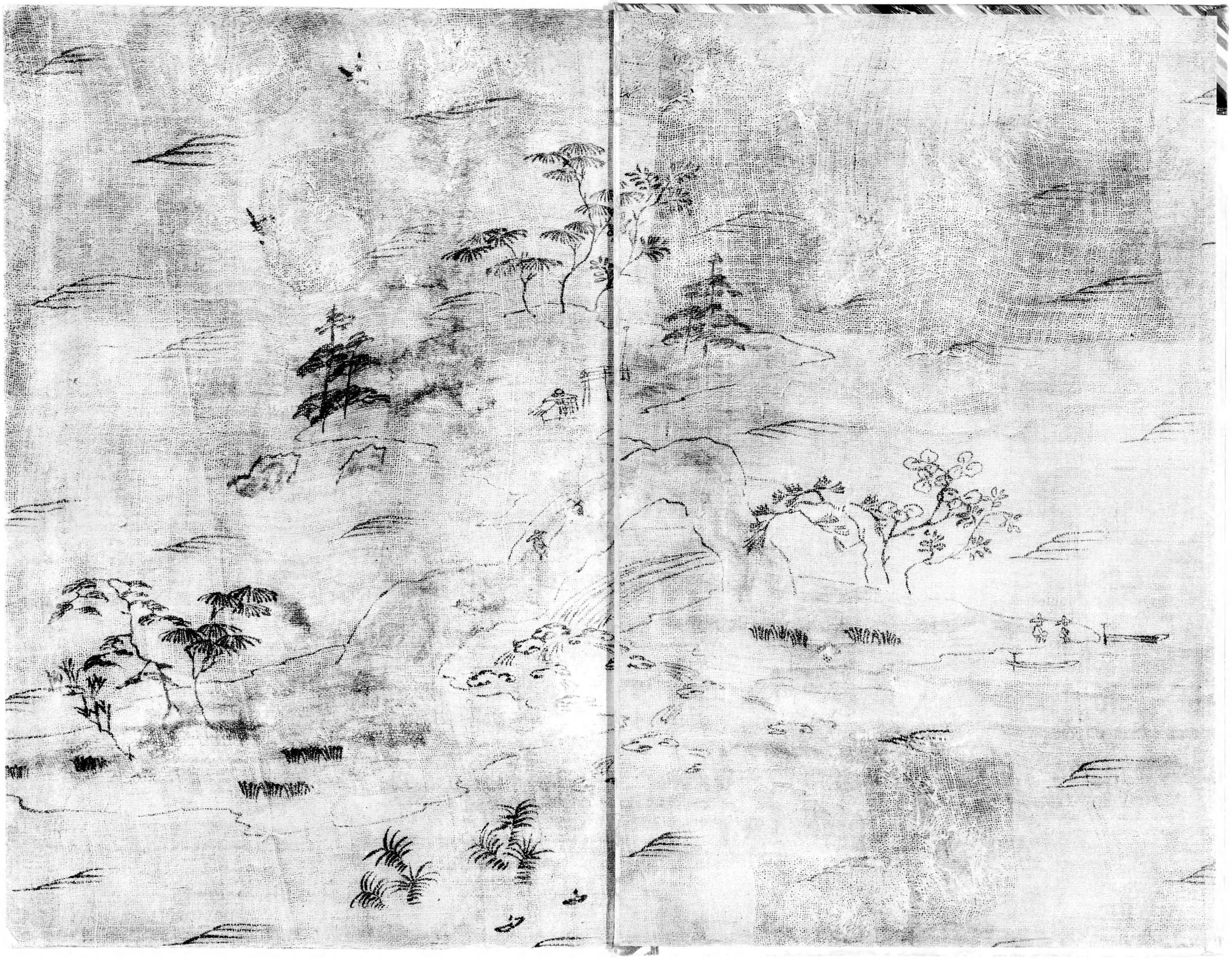
E709.2
Ko49
(8)

帙入

正倉院御物圖錄

八

始



E708 SH36 (8)
E 709.2 Ko49 (8)
帝國圖書館藏

正倉院御物圖録　第八輯

中倉納物

目次

第一圖　投壺　（一）
第二圖　同　（二）
第三圖　漆繪彈弓　（一）
第四圖　同　（二）
第五圖　彈弓
第六圖　桑木木畫碁局　（一）
第七圖　同　（二）
第八圖　桑木木畫碁局
第九圖　金銀繪碁子合子二合
第十圖　漆合子二合　（上）
　　　　金銀繪漆合子　（下）
第十一圖　紫檀木畫雙六局　（一）
第十二圖　同　（二）
第十三圖　同　（三）
第十四圖　榧雙六局
　　　　　紫檀金銀繪雙六筒

第十五圖　木畫螺鈿雙六局（一）
第十六圖　沈香木畫雙六局（一）
第十七圖　同（二）
第十八圖　漆胡樽二合（一）
第十九圖　同（二）
第二十圖　漆挾軾（上）
　　　　　白絁裹鎮子二枚（下）
第二十一圖　木笏
　　　　　魚骨笏
第二十二圖　黄熟香
第二十三圖　黒柹兩面厨子（一）
第二十四圖　同（二）
第二十五圖　柹厨子（一）
第二十六圖　同（二）
第二十七圖　白葛筥三合の一（一）
第二十八圖　同（二）
第二十九圖　白葛筥三合の二
第三十圖　白葛筥三合の三
第三十一圖　斑藺筥蓋（一）
第三十二圖　同（二）
　　　　　柳箱（一）
第三十三圖　同（二）
第三十四圖　漆皮箱二合の一（上）
　　　　　同（下）
第三十五圖　金銀平脱漆皮箱二合の一（一）
第三十六圖　同（二）
第三十七圖　同（三）
第三十八圖　金銀平脱漆皮箱二合の二（一）
第三十九圖　同（二）
第四十圖　密陀繪漆皮箱（一）
第四十一圖　同（二）
第四十二圖　同（三）
第四十三圖　沈香木畫水精荘箱（一）
第四十四圖　同（二）
第四十五圖　同（三）
第四十六圖　密陀彩繪箱三合の一（一）
第四十七圖　同（二）
第四十八圖　密陀彩繪箱三合の二（一）
第四十九圖　同（二）
第五十圖　同（三）

第五十一圖　密陀彩繪箱三合の三（一）
第五十二圖　同（二）
第五十三圖　同（三）
第五十四圖　梗楠箱
第五十五圖　白檀八角箱
第五十六圖　金銀繪木理箱
第五十七圖　黑柿蘇芳染金銀山水繪箱
第五十八圖　紫檀木畫箱（一）
第五十九圖　同（二）
第六十圖　紫檀箱
第六十一圖　瑇瑁螺鈿八角箱（一）
第六十二圖　同（二）
第六十三圖　銀平脱箱中蓋
第六十四圖　四重漆箱
第六十五圖　漆箱四合の一（上）
漆箱四合の二（下）
第六十六圖　漆箱四合の三（上）
漆箱四合の四（下）

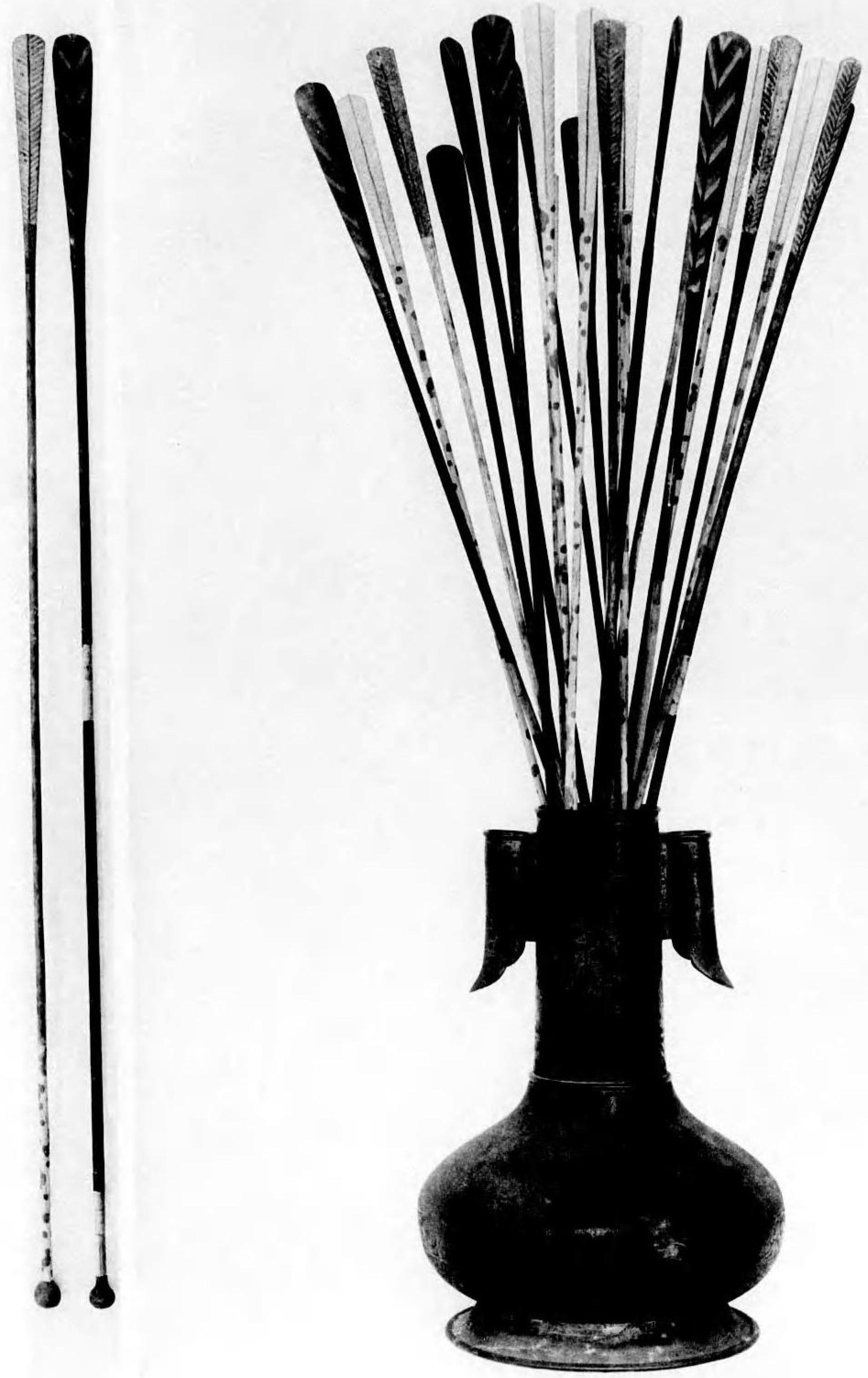
第一圖　投壺（一）

（縮寫三分ノ一）

壺　口徑七糎四　高三一糎　重五瓩四七五
箭　長七四糎七

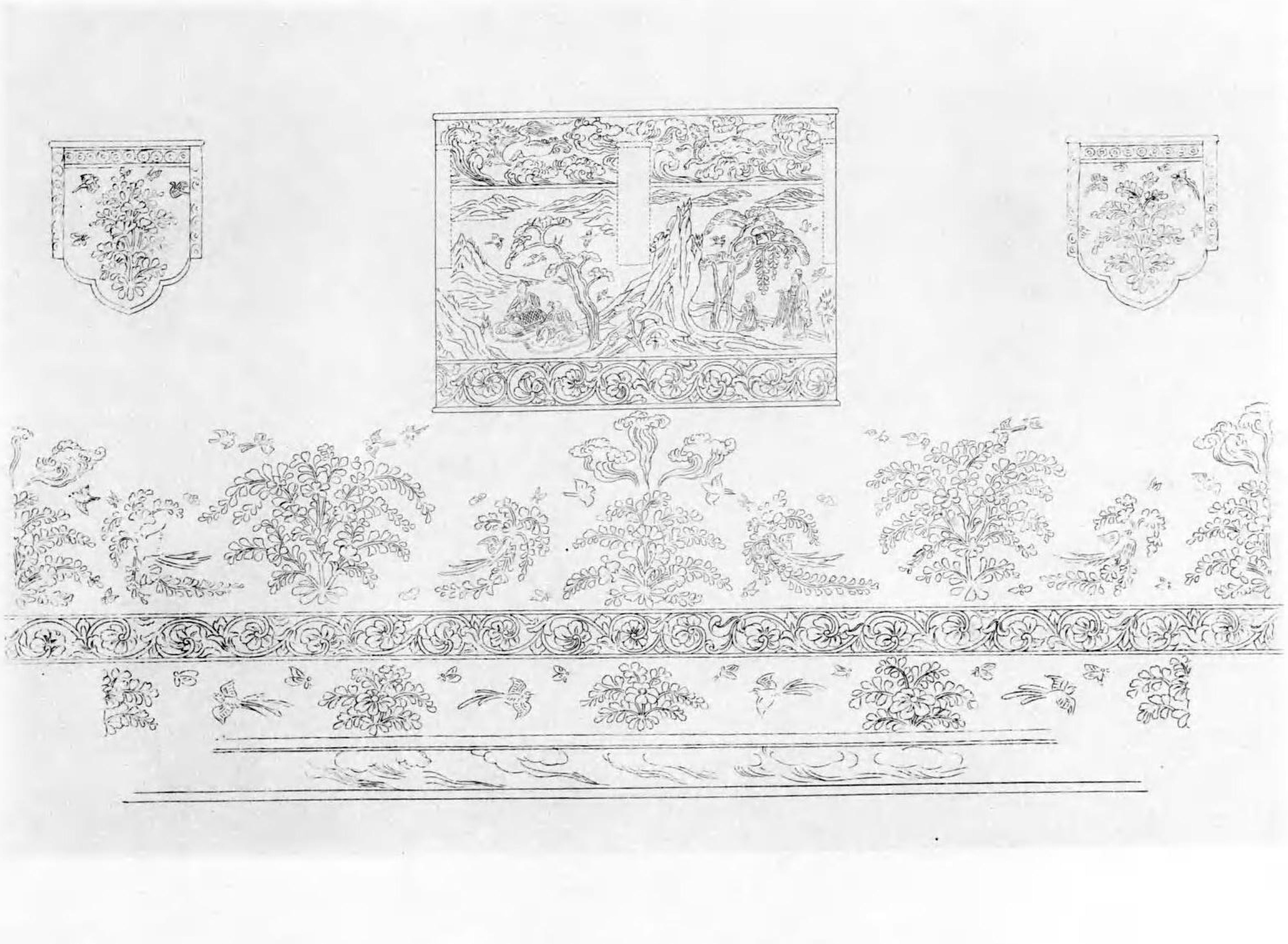
投壺は支那の遊戯具である。壺を中央にして東西相對し、各十二矢をもつて壺に投入して勝負を競ふもので、箭の或は壺耳を貫き、或は壺口に横はり、或は一旦壺に入つたのが激して躍り出る等によつて、それぞれ得點に差異があると云ふ。

壺は金銅製、下膨れの瓶形をなし頸邊に兩耳を作る。兩耳は壺の飾りではなく投壺必須のもので上下に貫通孔がある。箭は現存總數二十三隻、其の形は殆んど同じであるが、製作上二樣の別が見られる。一は木製、牛角綠青塗の鏑をつけ、幹に樺を纒き朱芳にて矢羽を描いたもの、他は竹製、朱塗の鏑をつけ金泥にて矢羽を描き、幹に黃土を塗り朱土墨で假斑を作つたものである。蓋し競技の場合敵味方識別のためと思はれる。圖版左は其の比較的完全なものを一本づゝ出して箭の全形を示す。



第二圖　投　壺　(二)　(縮寫五分ノ四)

壺の表面には全體に渉つて線刻の文様を施し、其の間隙には魚子を打つ。文様は壺の頸上部に於いて獅子に雲、頸中部に樹下人物像、耳には花卉飛鳥、胴部には飛雲花卉蝶鳥、香臺には波濤をあらはす。就中頸中部の樹下人物の線刻は、南倉紫檀木畫琵琶の撥面の圖と共に、獻物帳の古人畫屏風の圖様を想見させるものとして特別な關心をひく。



投壺線刻轉開圖

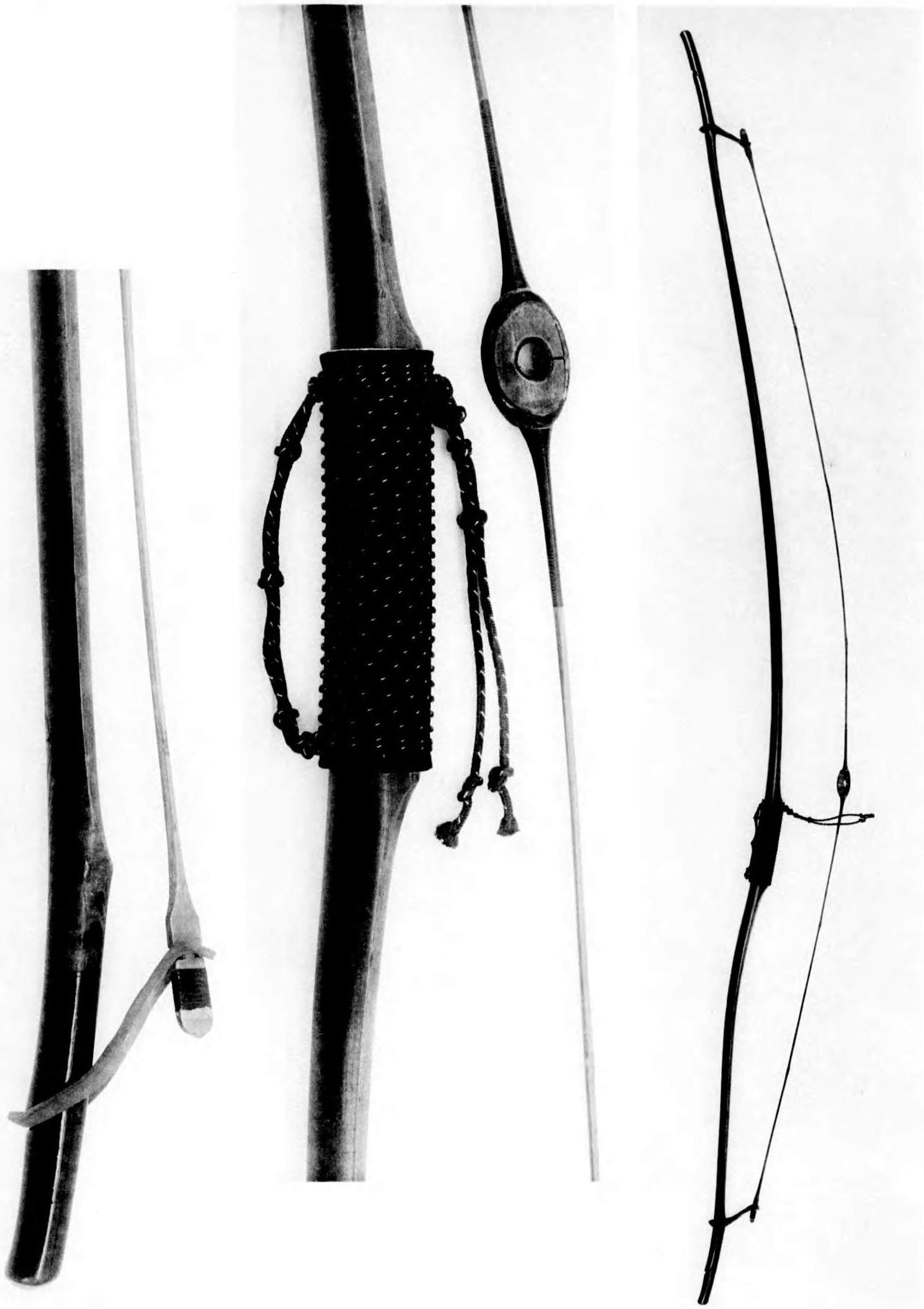
第三圖　漆繪彈弓（一）

（全形縮寫五分ノ一、部分原寸）

全長一六二糎

遊戯具の一つで弦に小丸（たま）をもり彈き興ずるものと云ふ。弓身は梓の白木造りで、兩弭には葉狀に黒漆を塗り、把には白革を內にして紫革を纏き更に雜色組緒を飾る。又弓身の弦に對する面には多數の人物像を描く。弦は竹製で、其の兩端と中央の丸座（たま）の部分とには特に樺纏を施し、且つ之が弭への連繫には丹塗の牛皮を用ふ。

圖版右端は弓の全形、中は把、左は本弭の部分をあらはす。



圖版右端は弓の全形、中は把、左は本弭の部分をあらはす。
弭には牙狀の牛皮を用ふ。
中央の丸處の部分とには特に緋鑑を施し、且つ之が周圍の邊
緣する面には象嵌の人物像を描く。尻は竹製で、其の兩端と
革を内にして紫革を纏ひ更に紺色組紐を飾る。又弓身の表に
身は梓の白木造りで、兩側には葉狀に墨漆を施す。把には白
漆塗、其の一つで握に小丸をもり隅を興するものと云ふ。

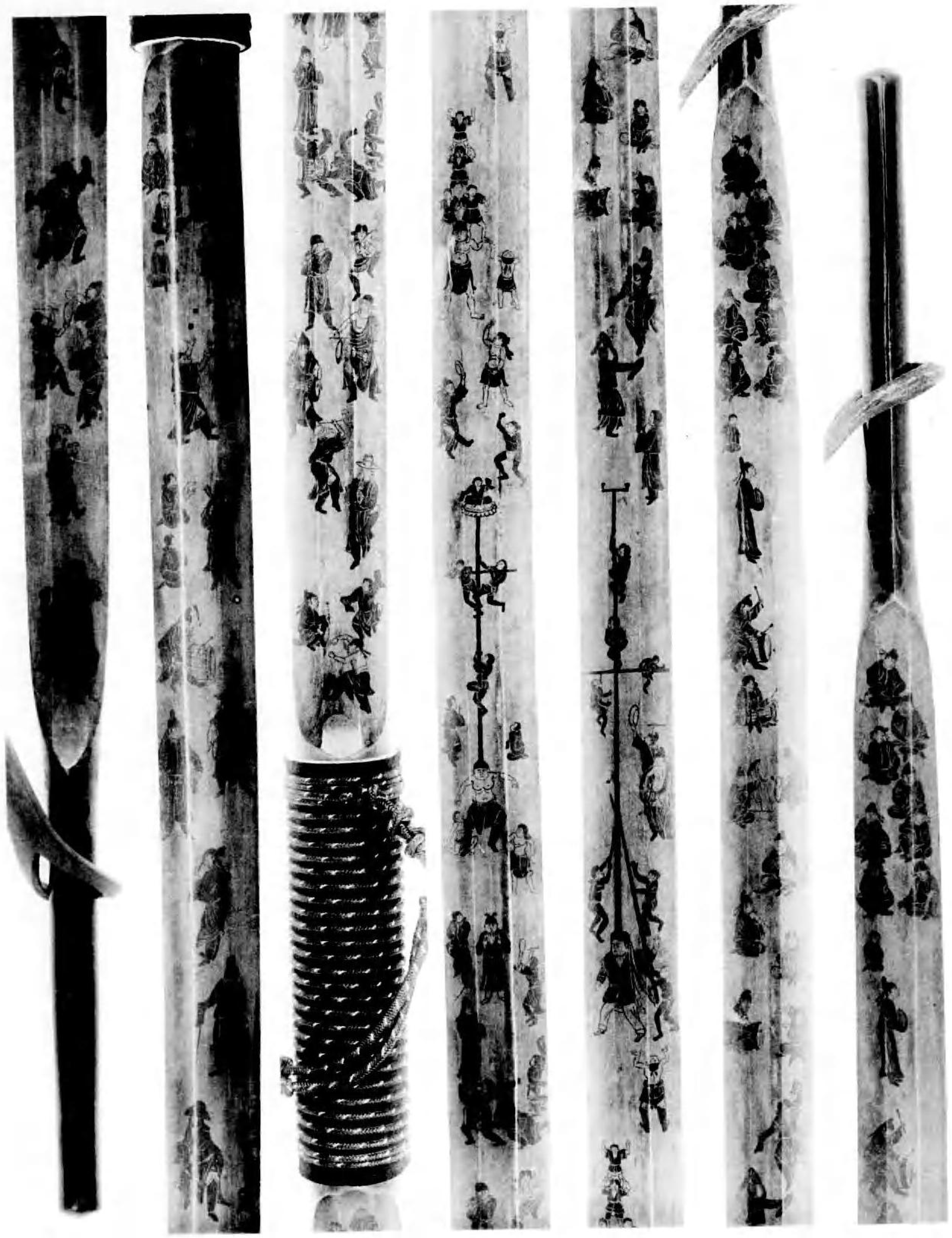
第三圖　漆繪彈弓（一）

（全長一六二糎）

（全蒔繪箭添へ（一）、參看照下）

第四圖　漆繪彈弓（二）　（原　寸）

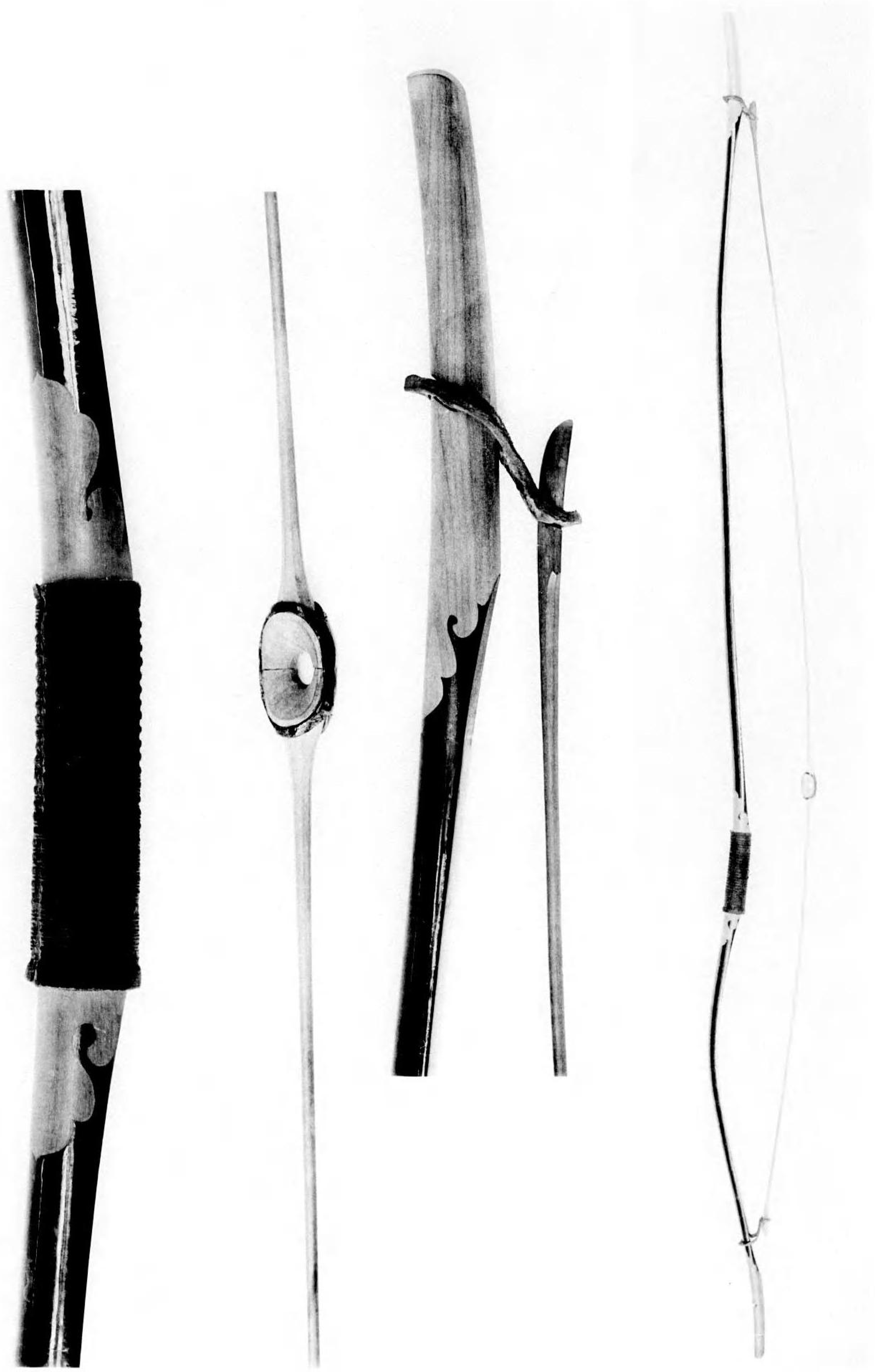
弓身內面の墨繪人物仝部をあらはす。圖版の都合上、原物通りの一連として掲載する事の出來ないのは遺憾だが、其の重複するところを酵酌すれば、構圖の仝體は先づ想像出來やう。描かれた人物は把より上に六十七人、把より下に二十九人、合計九十六人、老幼男女、或は冠或は帽、裸形もあれば赤跣もあり、大鼓・腰鼓・篞篌・琵琶・尺八・横笛・鈸子・笙・銅鑼・竽等を奏し、これに合せて舞ひ輕業し、又手鞠を弄ぶ等千姿萬態、往古の人情風俗の察せられて、興味甚だ深きものがある。



第五圖　彈　弓　（全形縮寫五分ノ一、部分原寸）

長一七一糎

弓身の材が梓である許りでなく、其の形も前掲漆繪彈弓と全く同じと云つてよいが、弓身の裝飾に於いて、これは兩弭と把とを榛木のまゝに殘し、其の弦に對する面を赤漆に、他を黑漆に塗つてゐる。

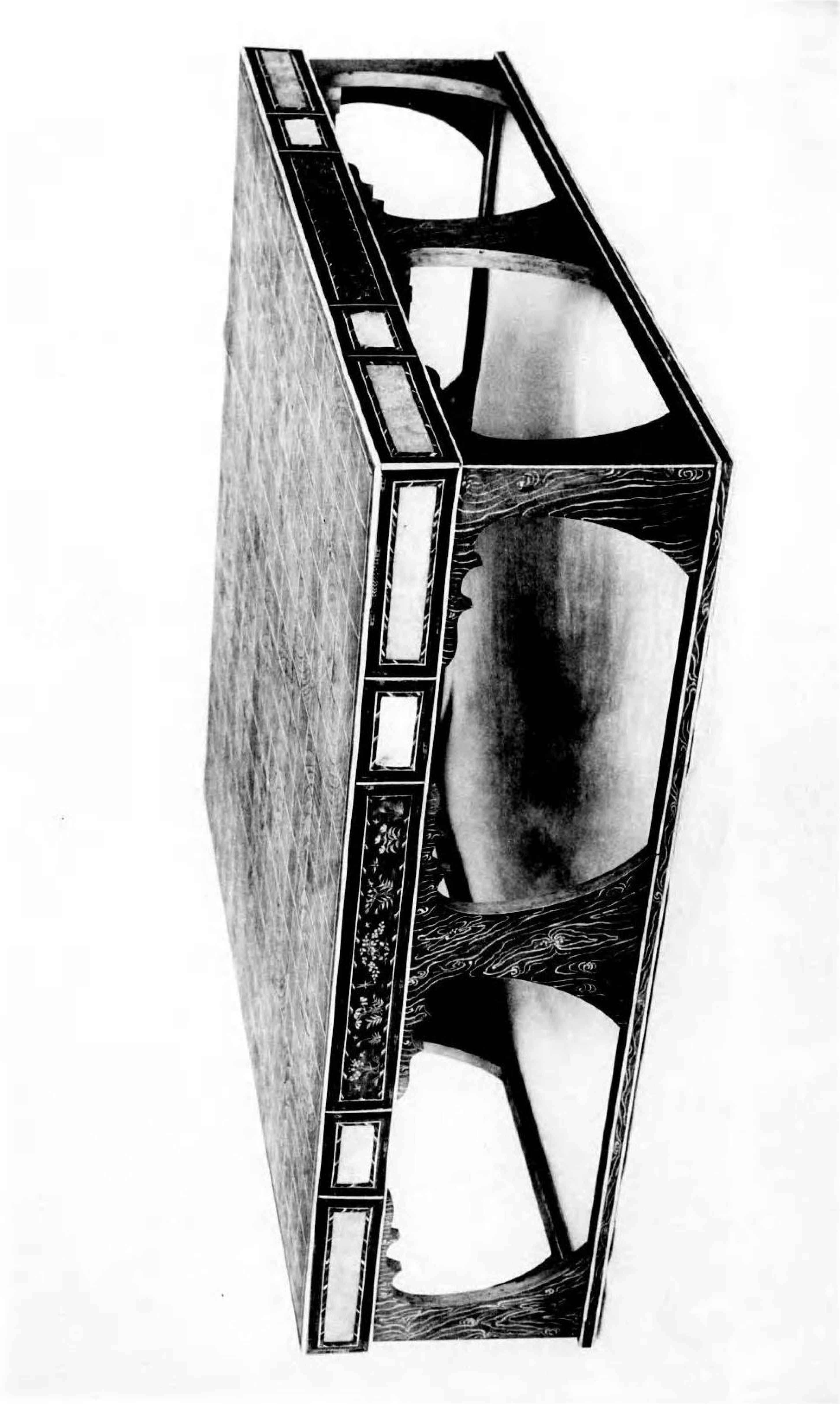


第六圖　桑木木畫碁局 螺鈿黄紺牙撥鏤莊（一）

（縮寫三分ノ一）

一邊長五二糎　高一五糎五

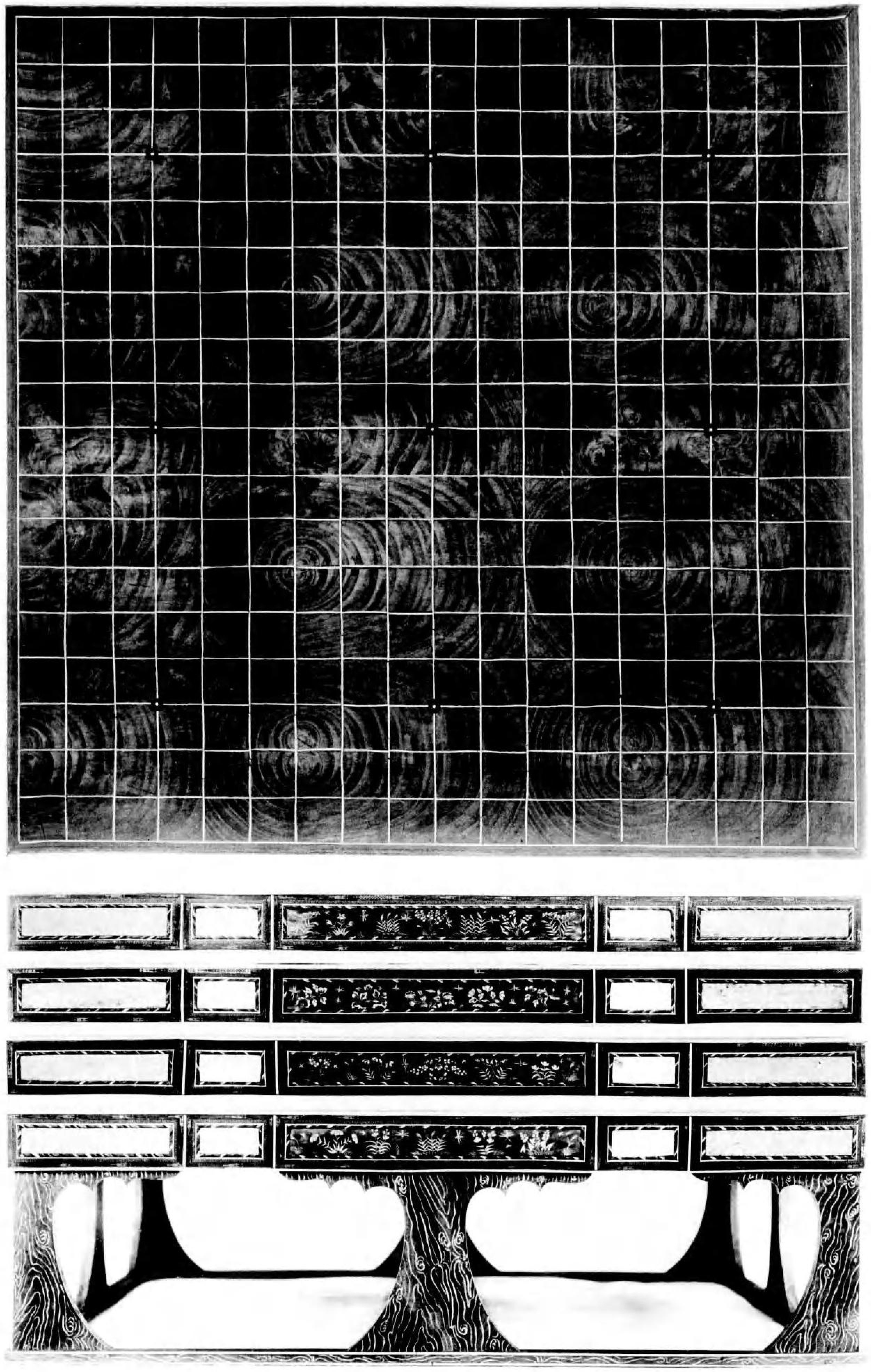
盤は蘇芳染一枚板の臺に桑の小口切板を張り、白牙の界線を嵌入して作られ、香狭間の透しある紫檀の床脚を附す。床脚には金泥にて木理を描き、又盤の側面には木畫を作りその間に撥鏤の文様ある象牙並螺鈿を飾る。



第七圖　桑木木畫碁局　螺鈿黃紺牙撥鏤莊（一一）　（縮寫七分ノ三）

前揭碁局の盤面と側面とを出す。盤面に配された花眼は九箇で北倉木畫紫檀碁局の十七箇に比べて八箇少いが、今の碁盤のそれと一致する事は興味深い。因に花眼の心は白牙、瓣は紫檀、界線は純金で作られてゐる。

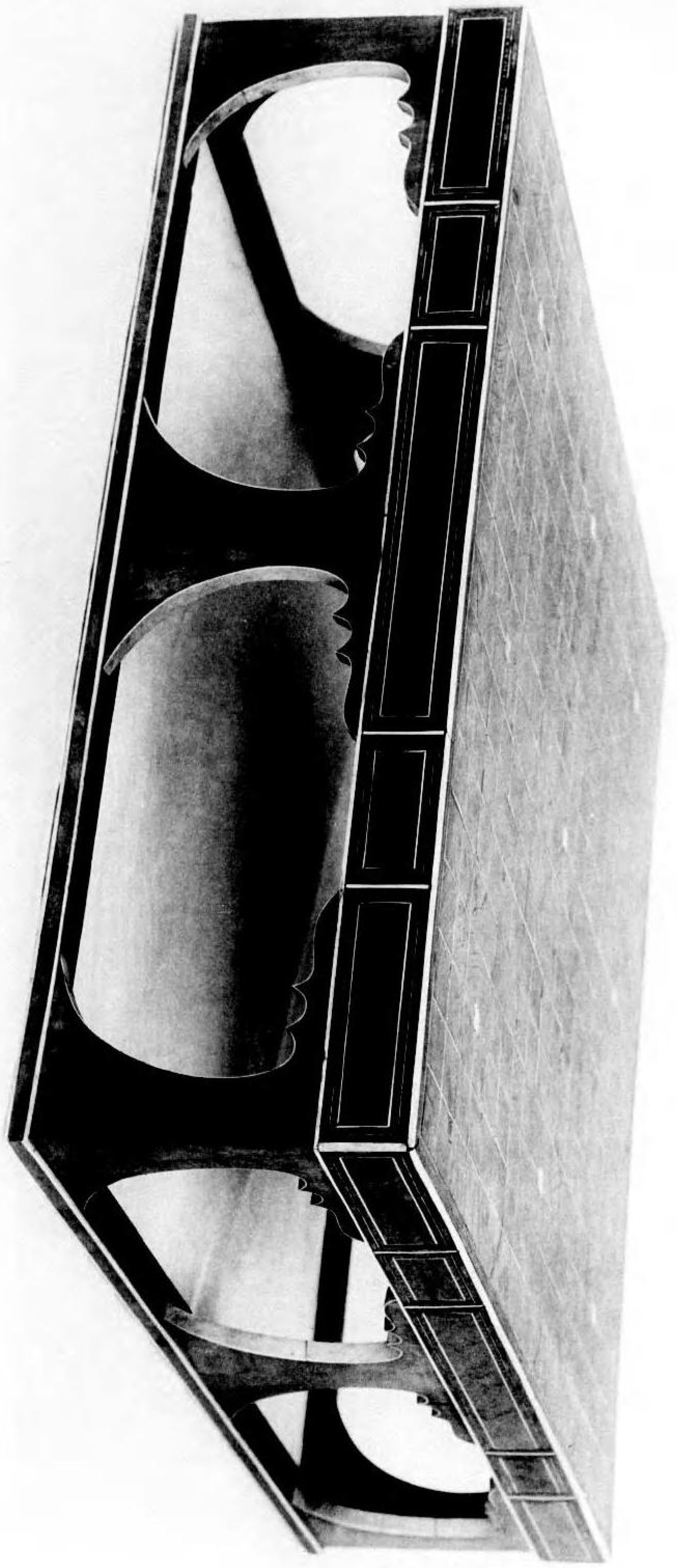
盤側面の撥鏤は中央紺牙、其兩側は白螺、兩端は黃牙よりなるが、文樣は變化に富み、同じものを反復してはゐない。此の事は撥鏤を廻ぐる矢羽形木畫の方向の必ずしも一定しないのと相待つて技巧の自由さを思はせる。



第八圖　桑木木畫碁局　（縮寫約三分ノ一）

一邊長五二糎　高一五糎一

盤面に桑の小口切板を張り、縁と側面とに木畫を嵌め、紫檀の床脚をつけ、香狹間を透し、鹿角で飾る等前掲碁局と甚だよく似てゐる。只彼と異るは盤面花眼の四辨白牙製なると側面螺鈿紺黃牙撥鏤莊の代りに單に濃淡ある紫檀を配し又脚に殊更金泥木理を作らなかつたこと位である。前者の華麗には及ばぬが、それだけ實用的である。



第九圖　金銀繪碁子合子　二合　（原寸）

各徑九糎四　高五糎

杉材の挽物、白木地の合子で、其の上面と側面とに金銀泥で唐花蝶鳥の文様を圖してゐる。一双の製作殆んど同じと云つてよいが、其の文様に於いて、一方鳥を銀とすれば他方は金、一方花心を金にすれば他方は銀と云つた風に、相反する色調に於いて描かれてゐるのは注意を要する。蓋し碁子の黒白に準せしめたものであらう。

第十圖　漆合子二合（上）（縮寫四分ノ三）

徑一五糎　高七糎四
徑一六糎三　高六糎二

木心布張黒漆塗の合子である。直ちに碁笥と斷ずるわけにはゆかぬが、類をもつてこゝに收む。

金銀繪漆合子（下）（原　寸）

蓋徑一〇糎　高二糎五

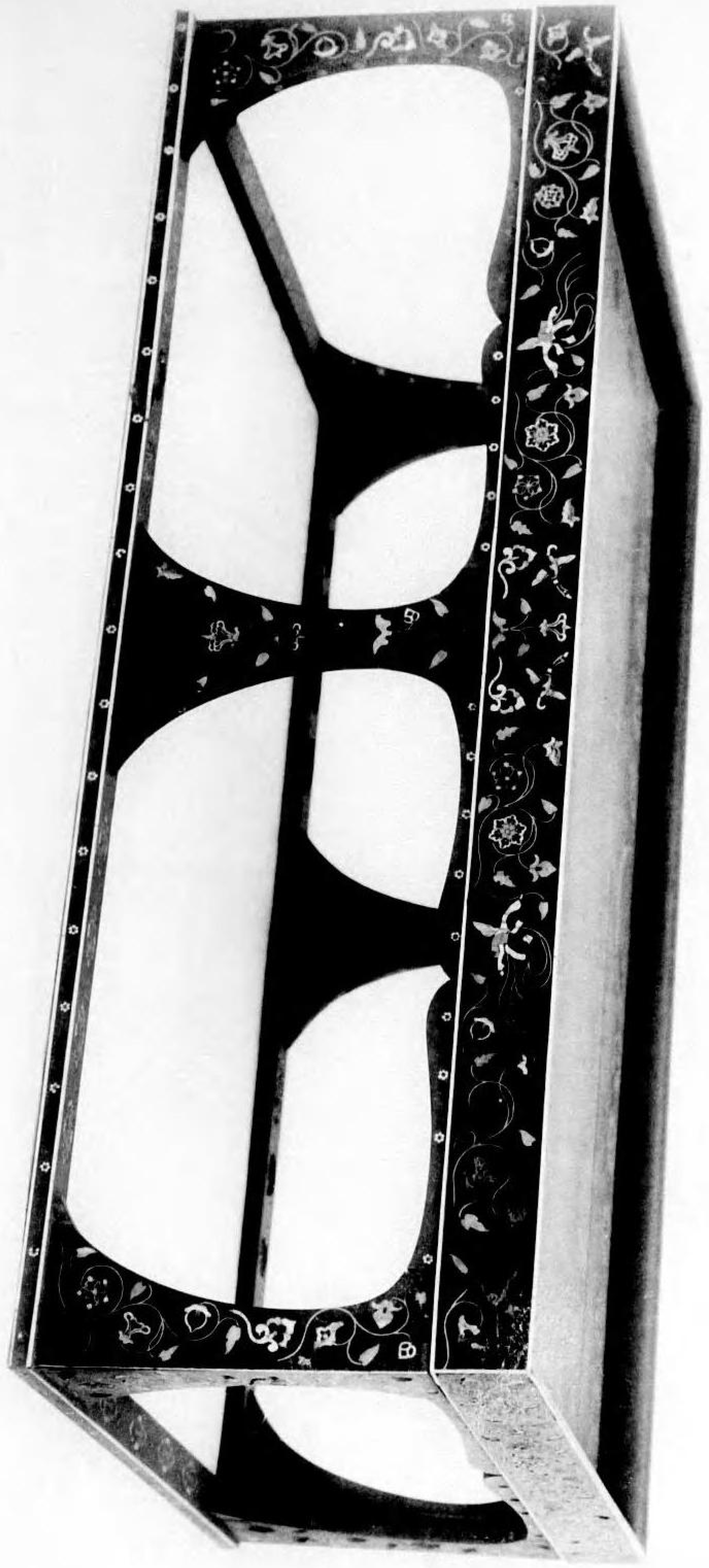
身は後補、蓋だけが舊物。木心布張黒漆塗で、上面中央には金泥で鳳凰を描き、それを繞つて銀泥の瑞雲を配す。又側面にも金銀の草花文をあらはす。

第十一圖　紫檀木畫雙六局（一）

（縮寫約五分ノ二）

竪三〇糎六　横五四糎五　高一八糎

全部紫檀材にて作られ、之に精巧な木畫を施したもので、雙六局中優秀のものである。盤の周圍に立ち上りの緣があり、床脚に香狭間を透すは後世の雙六盤と甚だ異る。

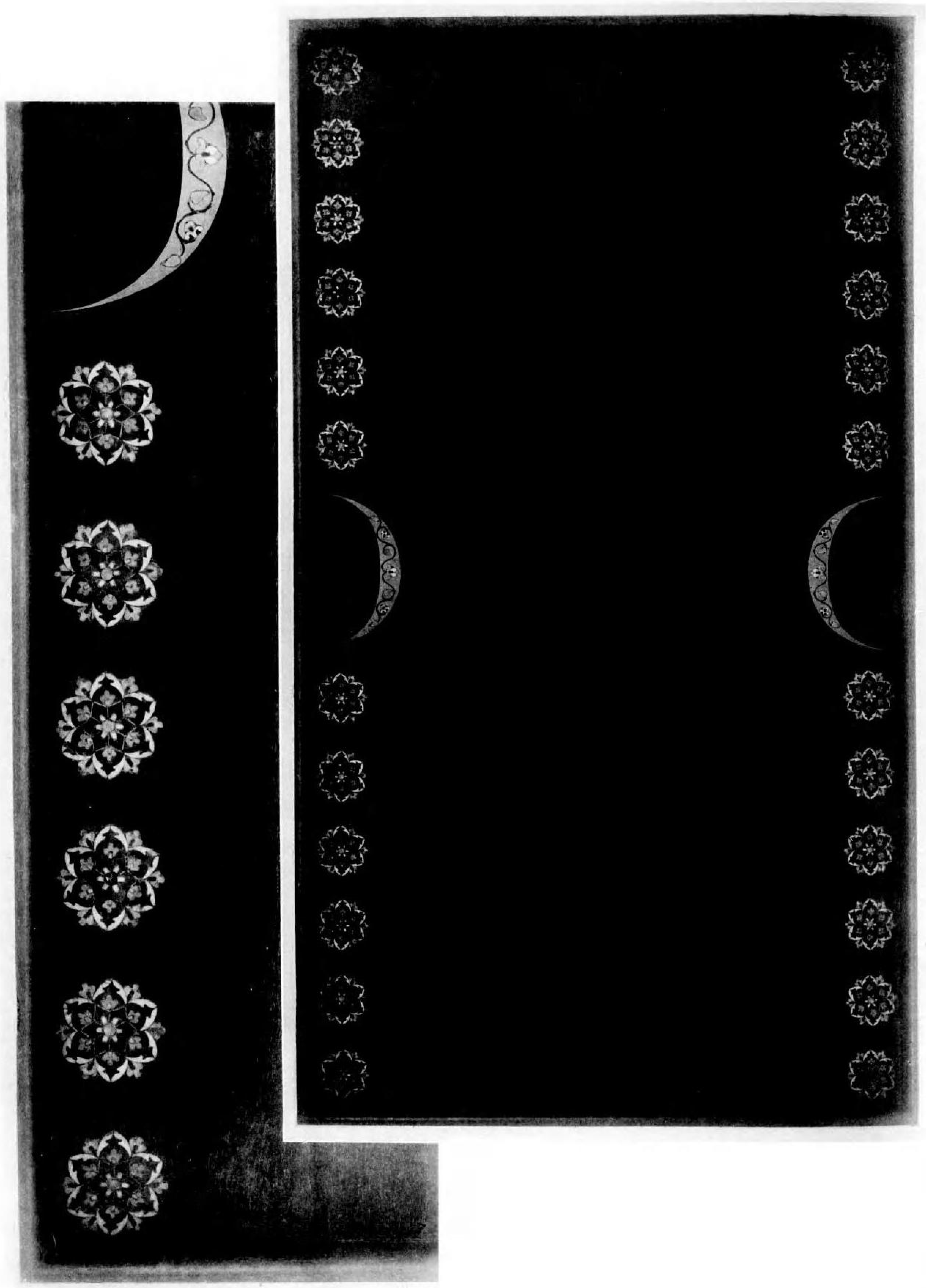


第十二圖　紫檀木畫雙六局（二）

（縮寫三分ノ一、下原寸）

前揭雙六局の盤面を示す。中央三ヶ月形の雙側に各六個づゝの花形を木畫するは配石の位置を示すもので、雙六の名は蓋しこれより出づと云はれてゐる。

下圖は特に木畫の部分を原寸にて表はす。



第十三圖　紫檀木畫雙六局（三）

（原　寸）

側面の部分を原寸にて示す。其の處々に見える剝落の痕は、以つて木畫製作の工程を察するに足る。こゝに用ひられてゐる木畫の材料には黄楊木・紫檀・鐵刀木・水牛角・綠角・白牙等がある。上方左隅を飛ぶ鳥の腹部の斑點は竹の小口切を用ひたものである。

第十四圖　榧　雙　六　局

（縮寫約八分ノ三）

竪二九糎　横六八糎　高一六糎三

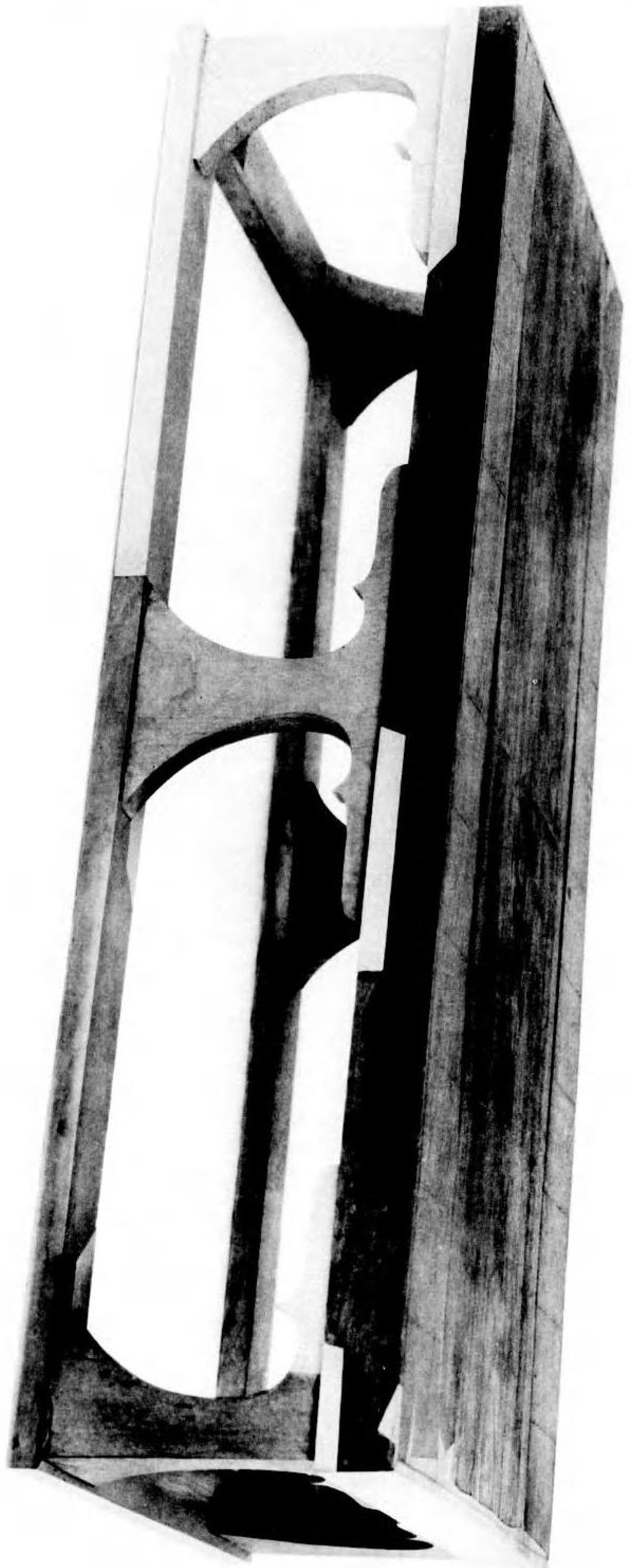
三枚の板を接ぎ合せて盤となし、香狹間の透しある床脚を着く、盤の面には前掲紫檀木畫雙六局に見る樣な花形の徽は無いが、恰も其の位置に當つて紫檀の界線を嵌め左右六個づゝの坪を作る。

紫檀金銀繪雙六筒

（原　寸）

口徑三糎二　高八糎五

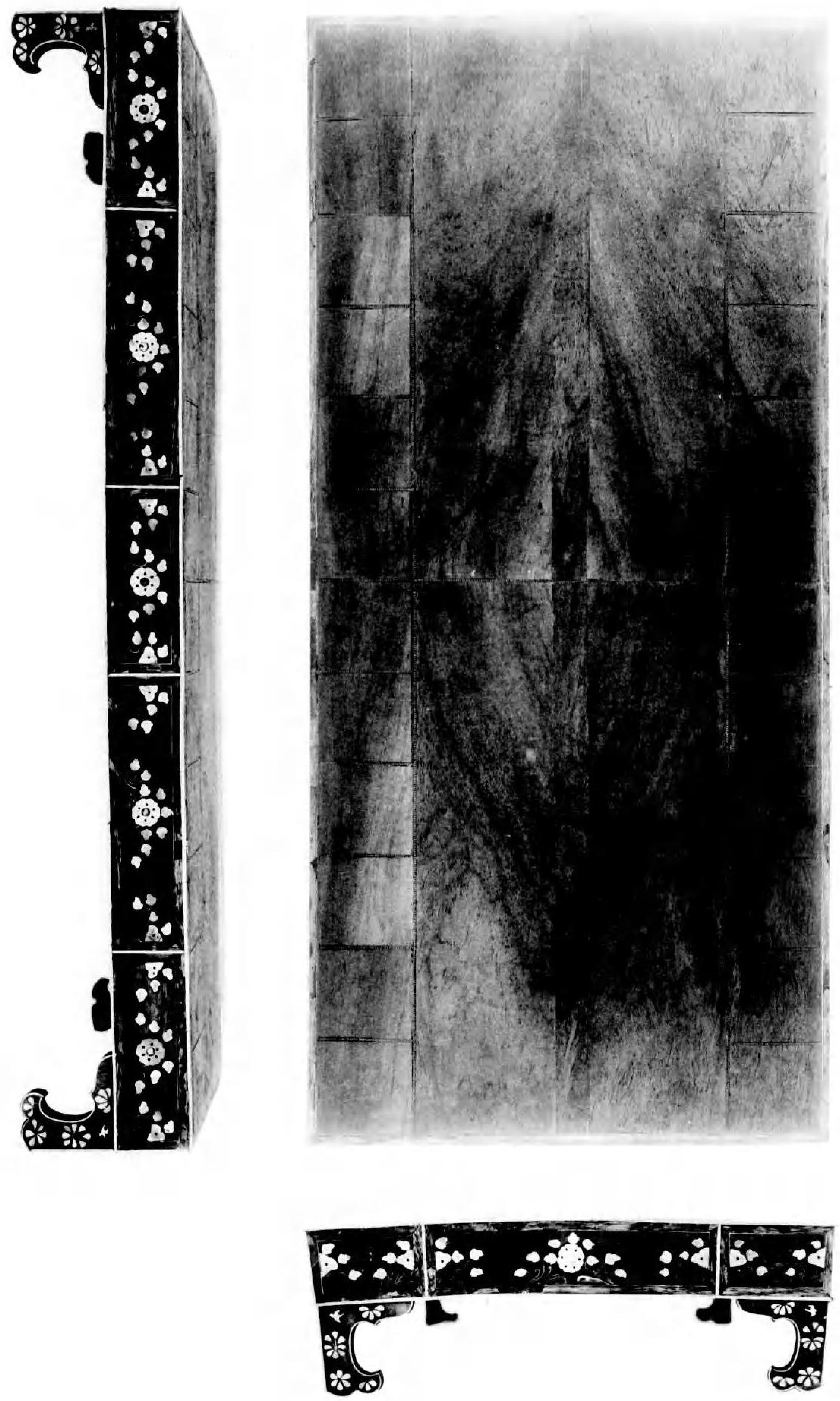
雙六の骰子を入れて振り出す具である。筒は轆轤製の刳物で、材は紫檀、其の側面には金銀泥で花卉蝶の文樣を圖し、又口緣と底部とには銀製金具をつく。因に、此雙六筒はどの雙六盤に附屬するものか明かで無い。



第十五圖　木畫螺鈿雙六局（縮寫八分ノ三）

竪三三糎　横七一糎　高一一糎

盤面の區劃は前の榧雙六局と甚だよく似てゐるが、共の斷面に於いて中央の特に隆起するところから雙六局にあらず彈棊盤であらうとの說もある。盤は柿材の臺に紫檀を張り、上面に木畫の界線、側面と脚部に螺鈿の花文を作る。



第十六圖　沈香木畫雙六局（一）

（縮寫約五分ノ三）

竪二九糎　横四三糎七　總高七糎三

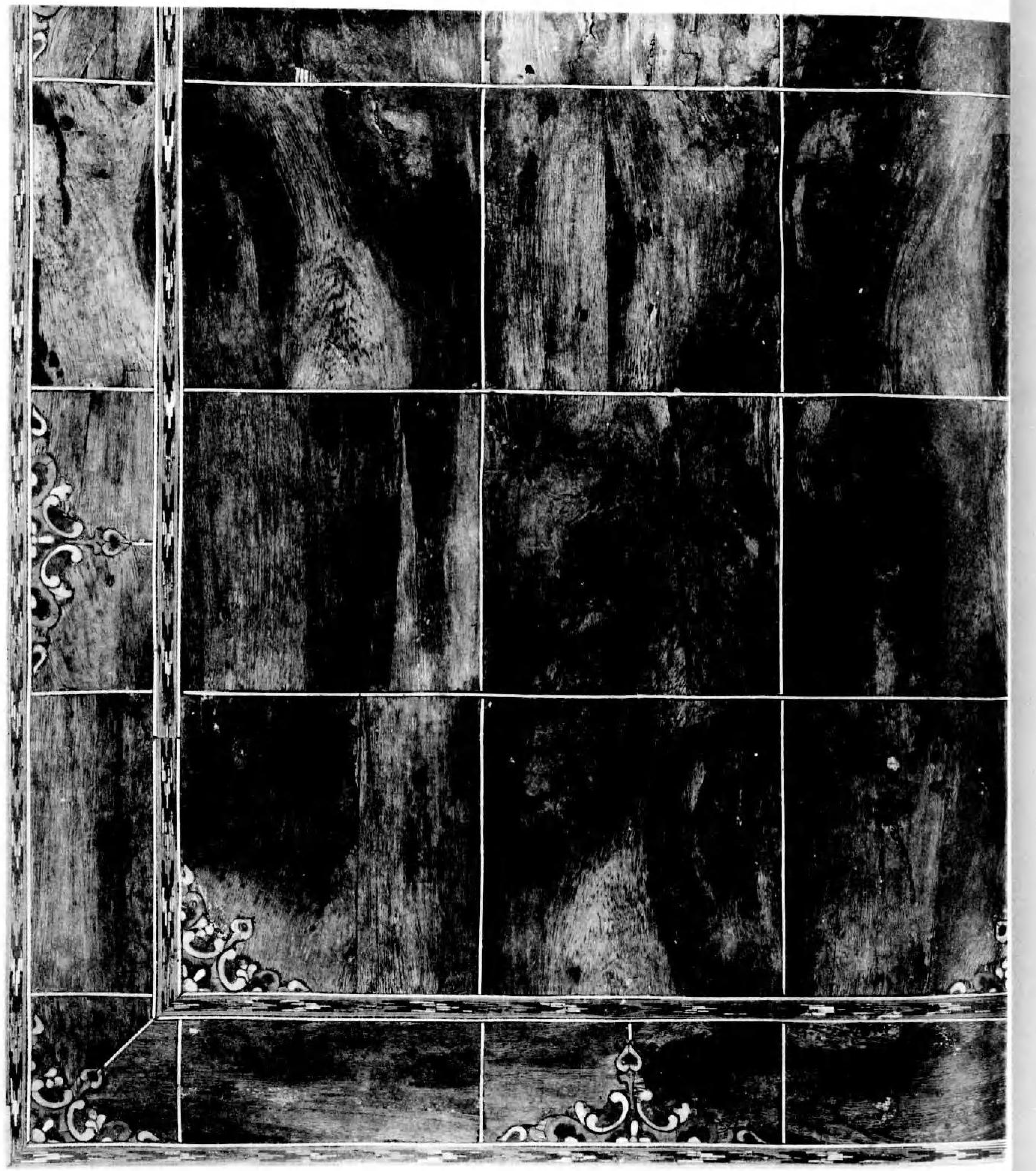
盤面は木畫の界線によつて先づ内區外區に大別せられ、更に白牙の界線によつて内區を十五區外區を二十四區に分ち、其の各區には沈香を嵌めところ〴〵に木畫の窠文を覗かせる。區劃の體裁は前掲雙六局の何れとも異り、果して雙六局かどうか甚だ疑問である。

床脚は黒柿製で香狹間の透を作るが新補の部分が多い。

第十七圖　沈香木畫雙六局（二）

（原寸）

前掲局面の部分である。こゝの木畫の材料は紫檀・黄楊木・白牙・緑牙等が用ひられてゐる。



第十八圖　漆胡樽二合（一）

（縮寫四分ノ一）

各長九二糎　重四瓩一八五瓦

二合は形に於いて正反對をなすが、何れも割合に輕い木で胴を作り布を張り黑漆をかけ、各二個の環を着け、其の製作は兩者全く同樣である。此の器の確かな使途に就いては未だ詳で無いが、其の形と製作とから察するに二合一具とし左右相對せしめて用ひたものであらう。

第十八圖 漆 [illegible] 一合（二）

第十九圖　漆胡樽（二）

（右原寸、左縮寫九分ノ四）

斜面と口の部分を示す。口は長徑一〇糎、短徑七糎五の楕圓形をなすが、帶のところに至つて約せられて徑二糎五の孔となり、それより奥は又次第に廣がつてゐる樣である。金具は兩者とも鐵製黑漆塗、鐶は其の斷面不正六角形をなし、六花形の座に堅く動かぬ樣に取りつけられてゐる。

第二十圖　漆　挾　軾（上）　（縮寫約四分ノ一）

高一米　幅一四糎六　高三〇糎八

大さも形も北倉の紫檀木畫挾軾に甚だよく似てゐるが、彼の裝飾的であるに對し、これは甲板も脚も黒の一色に漆塗して極く實用的である。甲板の兩端を直線に切らず蒲鉾形にしてあるのや、脚床の角を圓くしてゐる事も實用には前者より便利であらう。

白絁裹鎭子　二枚（下）　（縮寫三分ノ一）

長各六九糎三

木製の心材を綿で裹み、共の上から白絁を以つて覆つたものである。

のである。
木製で心材を縮で裹み、其の上を[illegible]白綾で以て[illegible]。

長各六九糎

白綾裹箱丁 二枚（下） （南倉[illegible]）

便利であらう。
であるいは、脚床の両端を[illegible]とる様な装用に供[illegible]
て極く實用的である。中板の両端を直角[illegible]
の装飾的であるに對し、これは中板も脚も[illegible]
入らうと[illegible]此作の[illegible]木[illegible]

高一米 幅、四[illegible] 高[illegible]

第二十圖 漆[illegible]几 机（上） （[illegible]）

第二十一圖　木　笏　（縮寫三分ノ一）

長三六糎　幅 上部四糎五 下部五糎一　厚 上部一糎四五 下部一糎七

木製には相違無いが、朽ちて質が脆くなつてゐる爲、其の何材であるかは詳にし難い。檜といふ説も楸といふ説もある。

魚　骨　笏　（縮寫三分ノ一）

長三六糎　幅 上部四糎二 下部四糎八　厚 上部一糎四五 下部一糎四五

魚骨は鯨の骨と云はれてゐる。一方の面には原寸にあらはした如く「宮」「延喜五年五月廿日□□□□」の墨書がある。

第二十二圖　黃　熟　香　（縮寫約六分ノ一）

全長一米五六糎　重一一瓩六〇〇瓦

一に蘭奢待の稱ある有名な香木である。一見樟叉欅材の朽廢した樣な脆質に見え、色も大體黑褐色を呈するが、其の切斷面は尙灰白色をなして質も甚だ堅緻である。材の心部は朽廢して大きな洞を作り、延ひてそれは枝の部分に及んだところもある。

此の香木は嘗て一部を截り取つて足利義政に賜り、後織田信長にも賜つた事があり、近くは明治天皇奈良行幸の砌依勅裁斷せしめられてゐる。

圖版上は香材の全形と附屬の二小片、下は元部の洞のところを寫す。

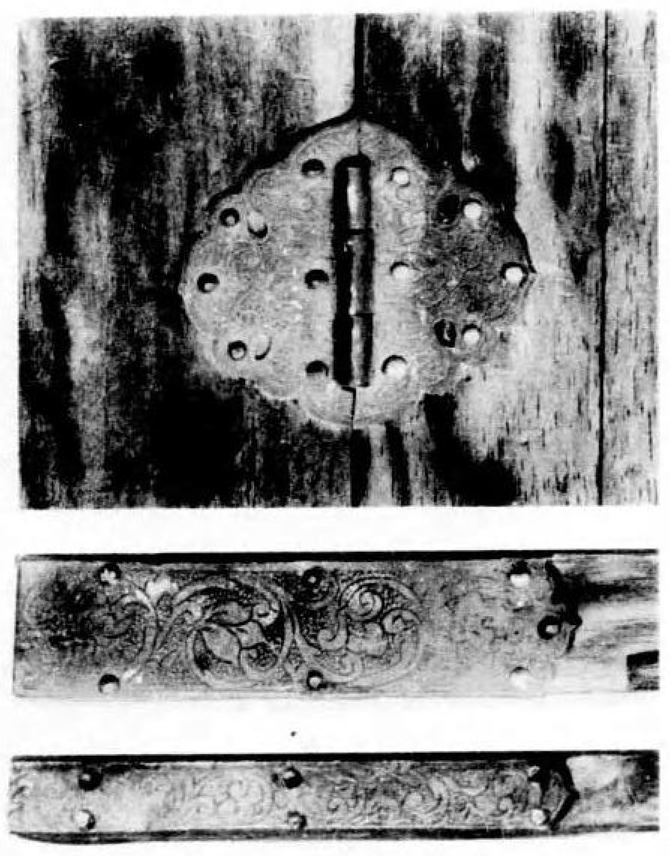
第二十圖

第二十三圖　黑柿兩面厨子（一）

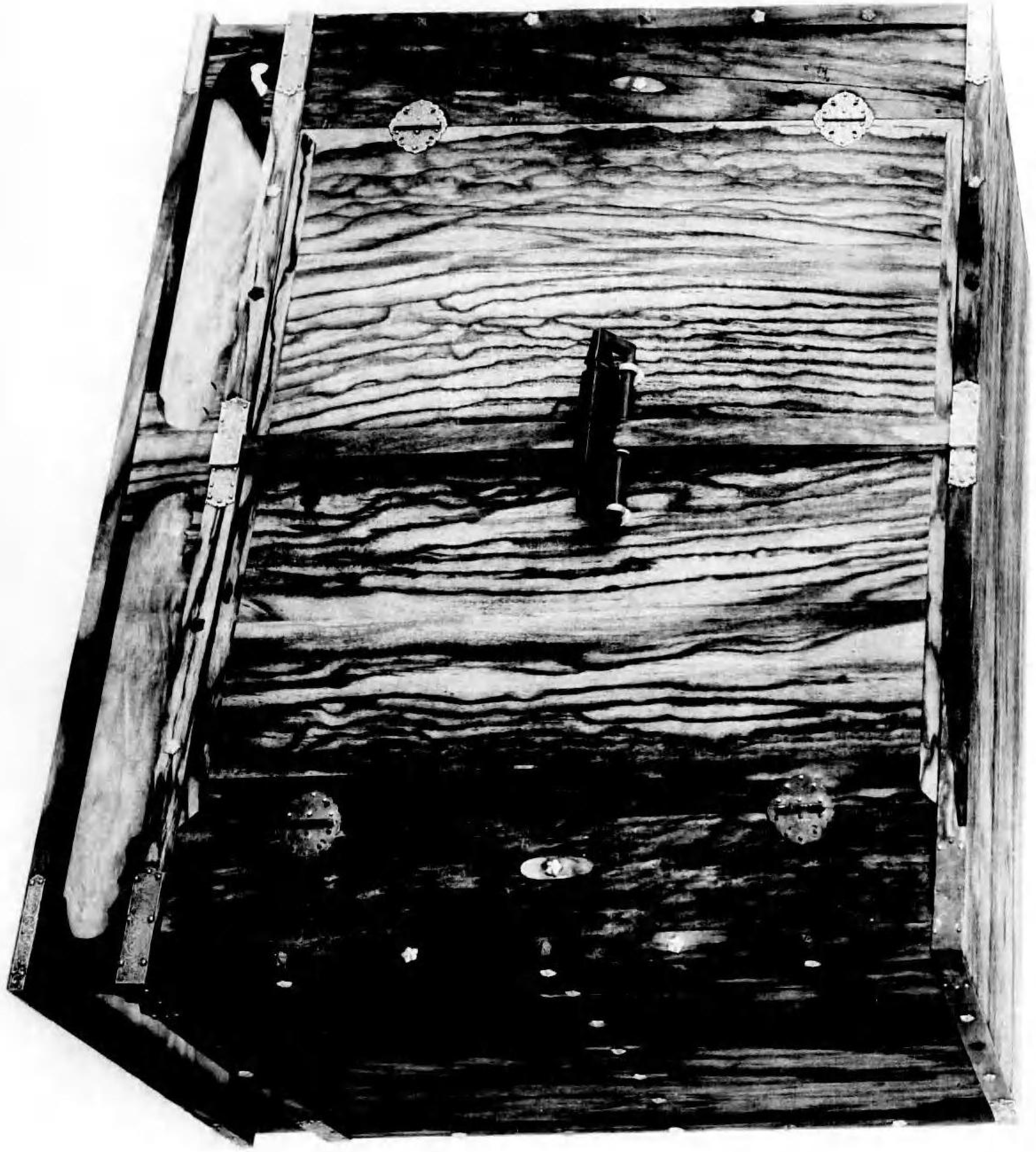
（縮寫約三分ノ一）

總高五二糎　幅六五糎五　奥行三四糎五

表背兩面に扉を設け、中に一段の棚を釣る。材は全部黑柿、金具は皆金銅製だが、共に新補の部分が相當多い。圖版で扉や框の木理鮮かな部分並に金具の白く光つてゐるところは何れも新補の箇所である。



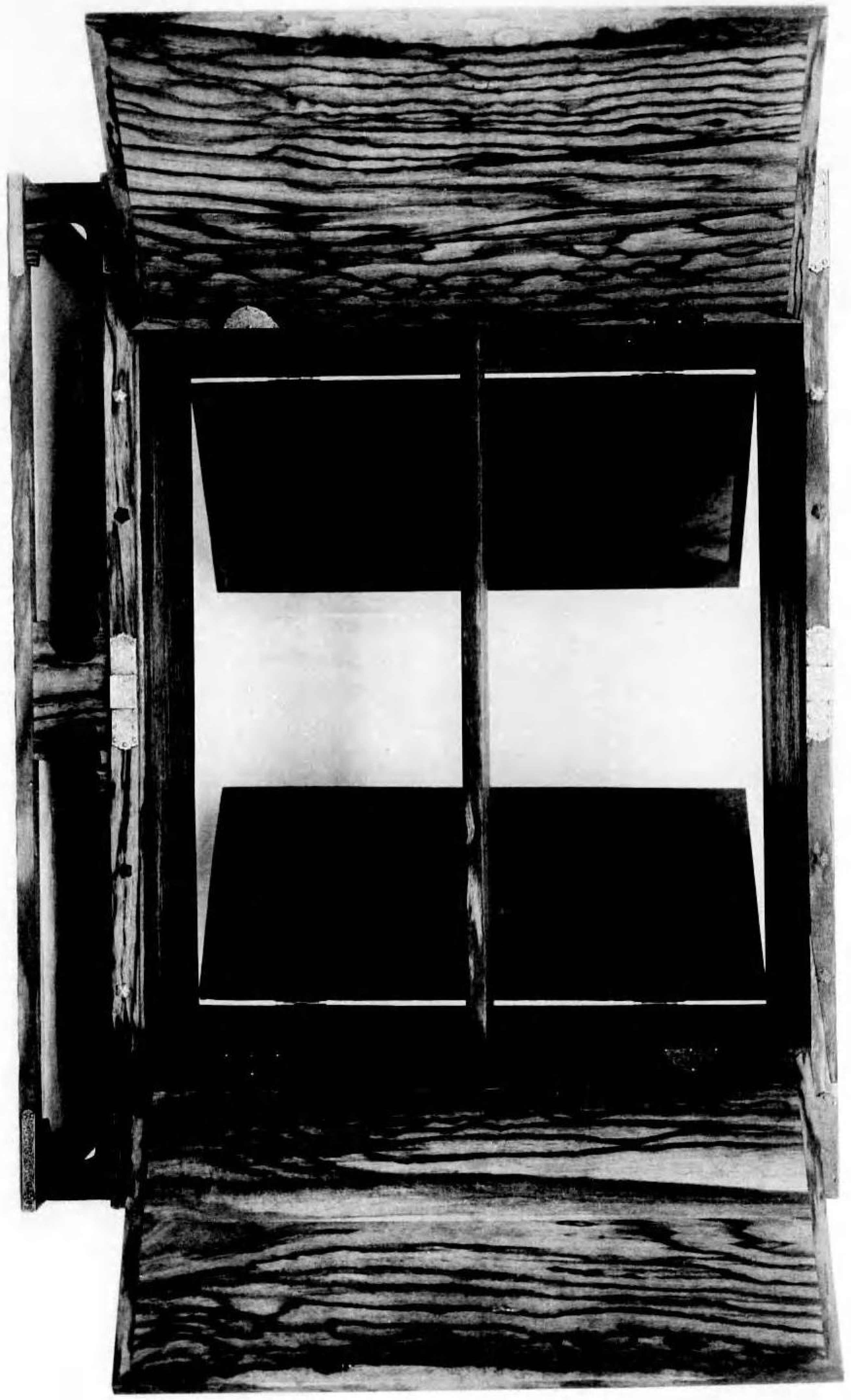
金銅金具（原寸）



第二十四圖　黑柿兩面厨子（二）

（縮寫七分ノ二）

扉を開放したところを示す。棚は正しく其の中央に釣られ、又底板と天井板とには各僅かばかりの刳出しを造つて扉のひつかゝりに當てゝゐる。蝶番金具は扉の表面だけでも事たるが、これには扉裏にも同形の金具が貼されてある。

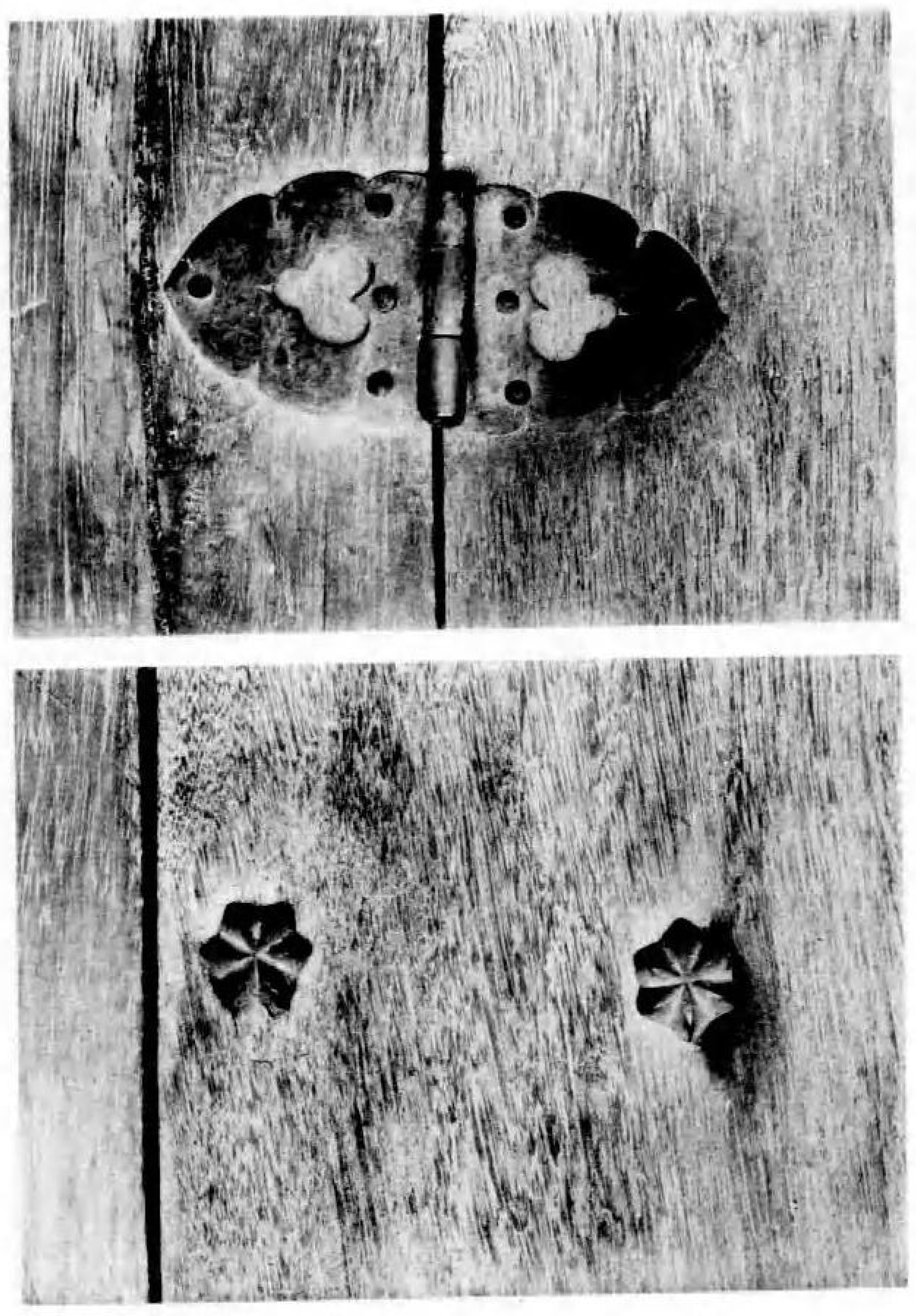


第二十五圖　柿　厨　子（一）

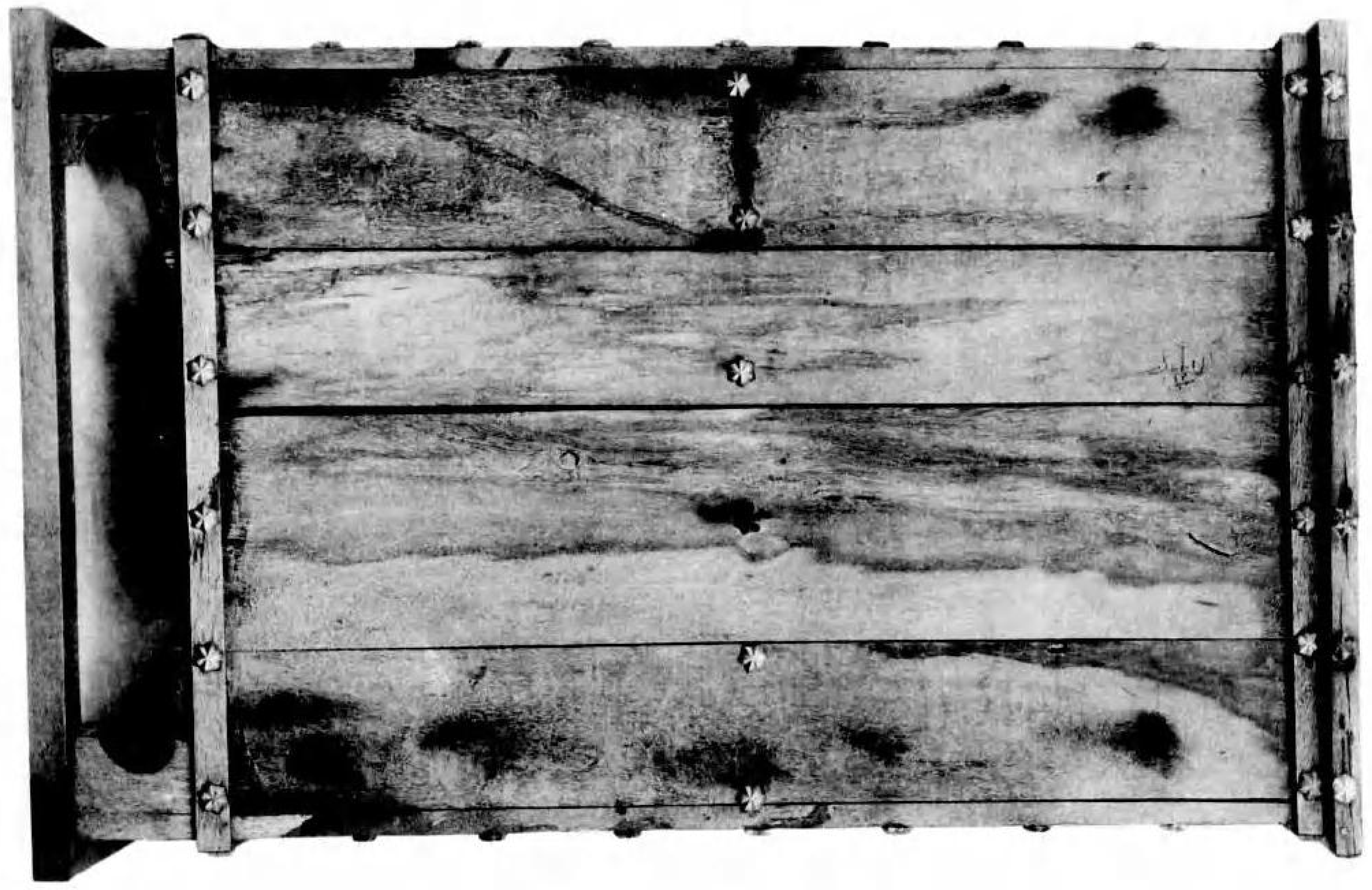
（縮寫七分ノ二）

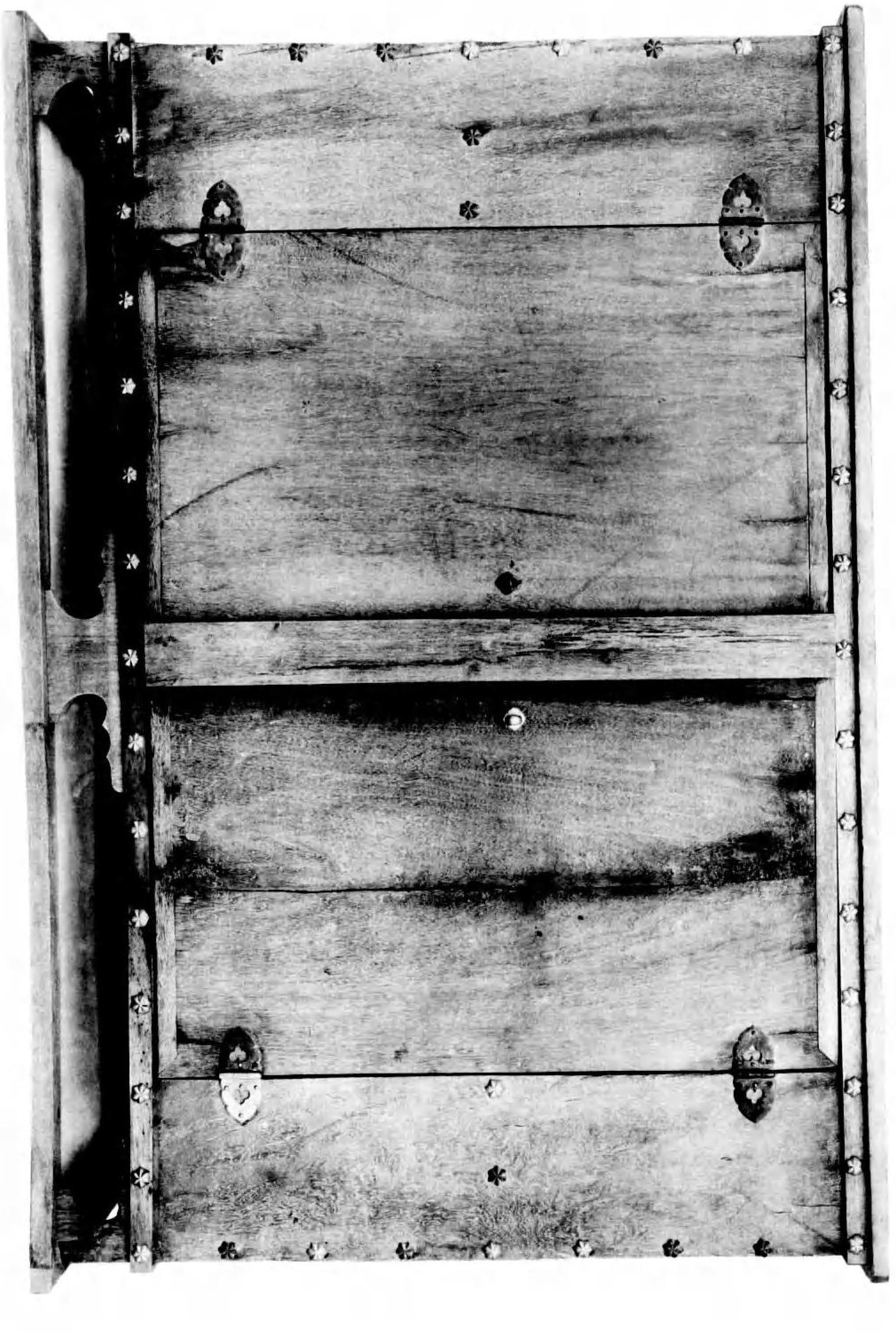
高五九糎五　幅八九糎二　奥行三七糎六

材は普通の柿で黒柿に見る様な斑は殆んど無い。金具は全部金銅製、就中蝶番金具の刳形は古雅甚だ愛すべく、又花形鋲の使用も本厨子にあつて特に多い。その正・側・背面を通じて貼せらるゝ數は無慮百五十三個を算え、實用よりも裝飾的の意味のより多いのを思はせる。圖版右は正面、左は其側面を示す。



金銅金具並鋲（原寸）



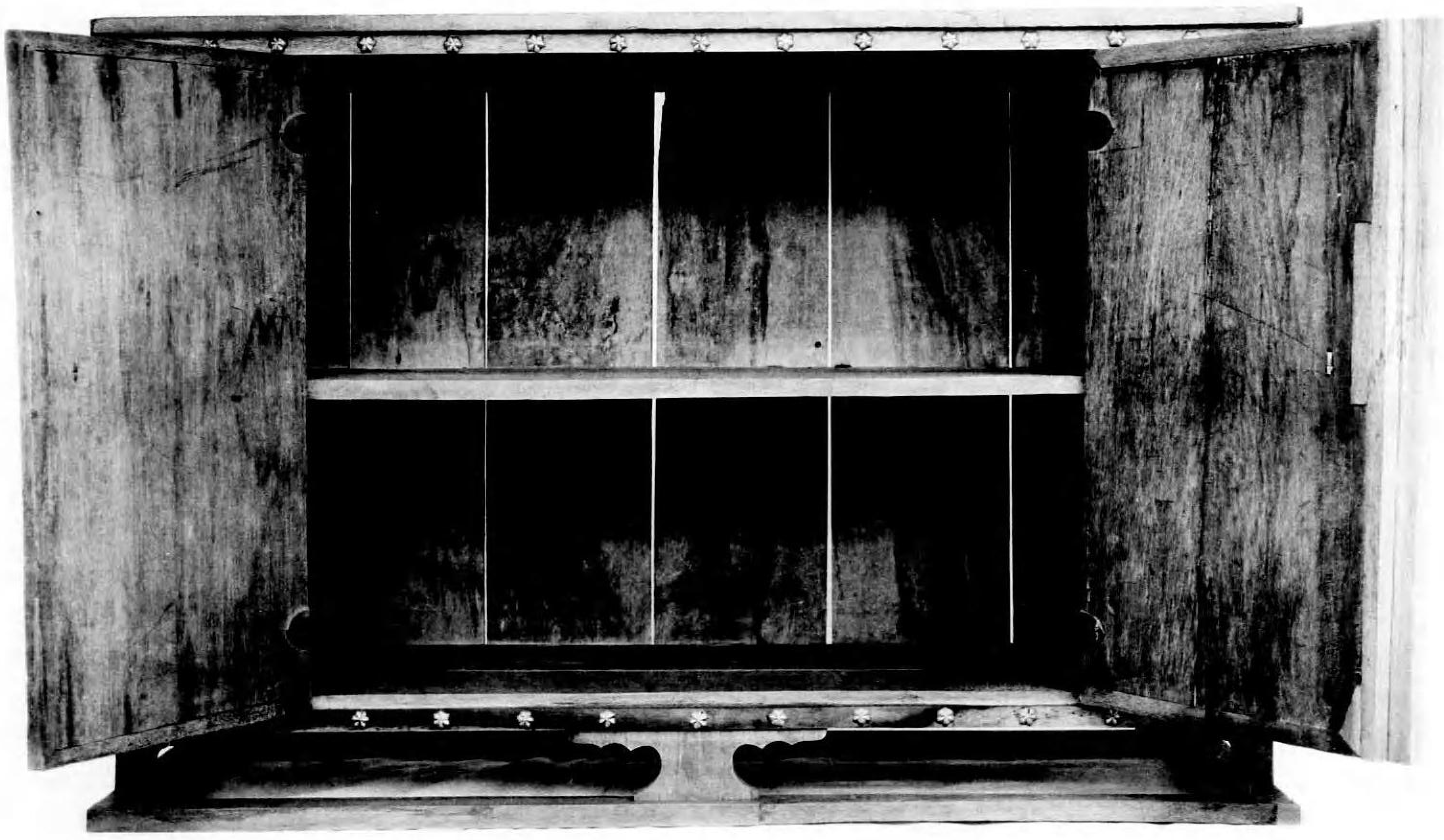


第二十六圖 柿 厨 子（二）

（縮寫四分ノ一）

扉を開放したところを出す。

此の厨子の扉の開閉に於いて、前掲兩面厨子又北倉文欟木厨子の如く貼木を用ひず、それに相當するものを扉の一方に造り附けてゐるのは後世の厨子の場合と甚だよく似てゐる。然しそれが修理によるものか、昔からさうであるかは俄かに決し難い。

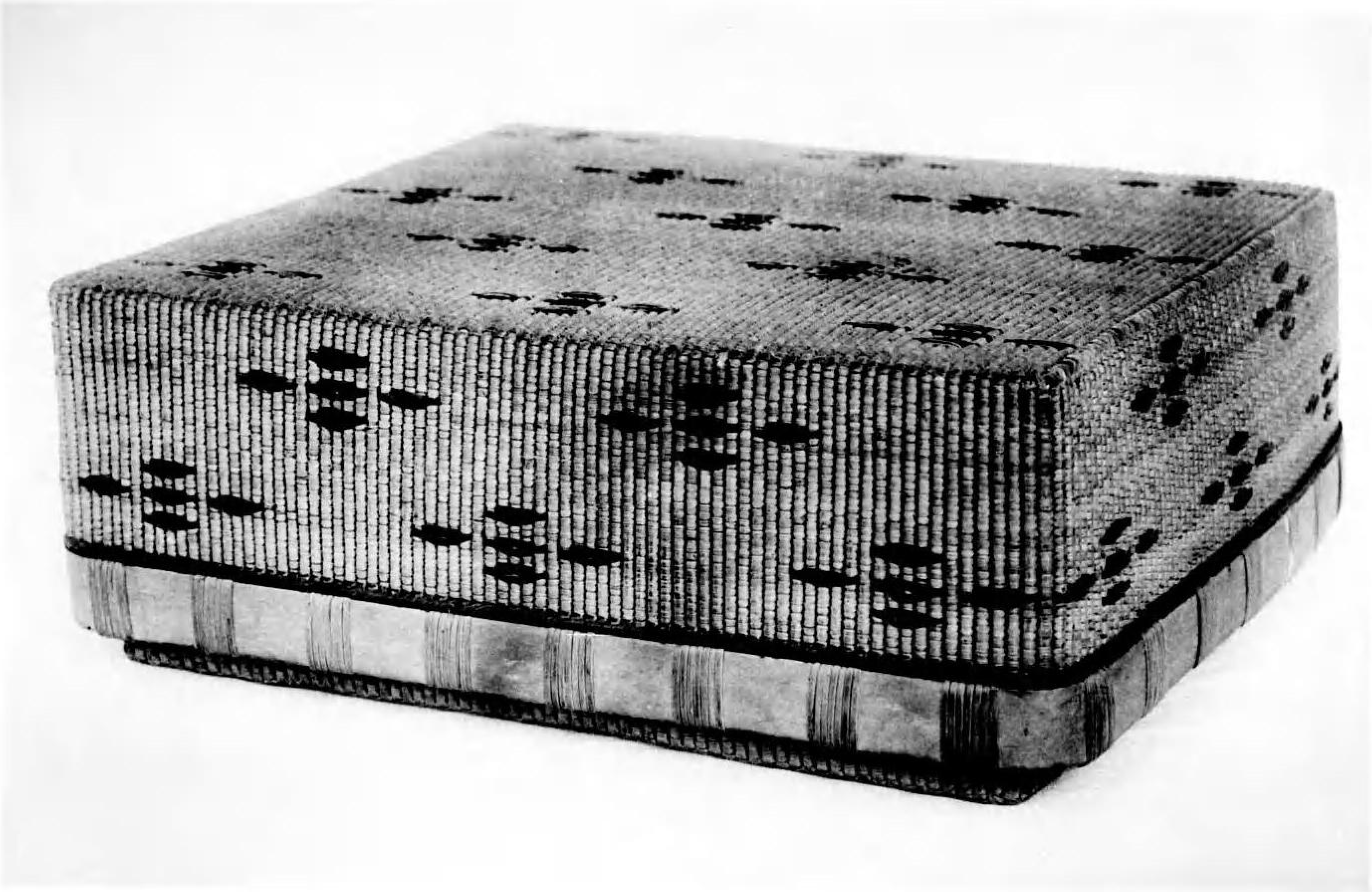


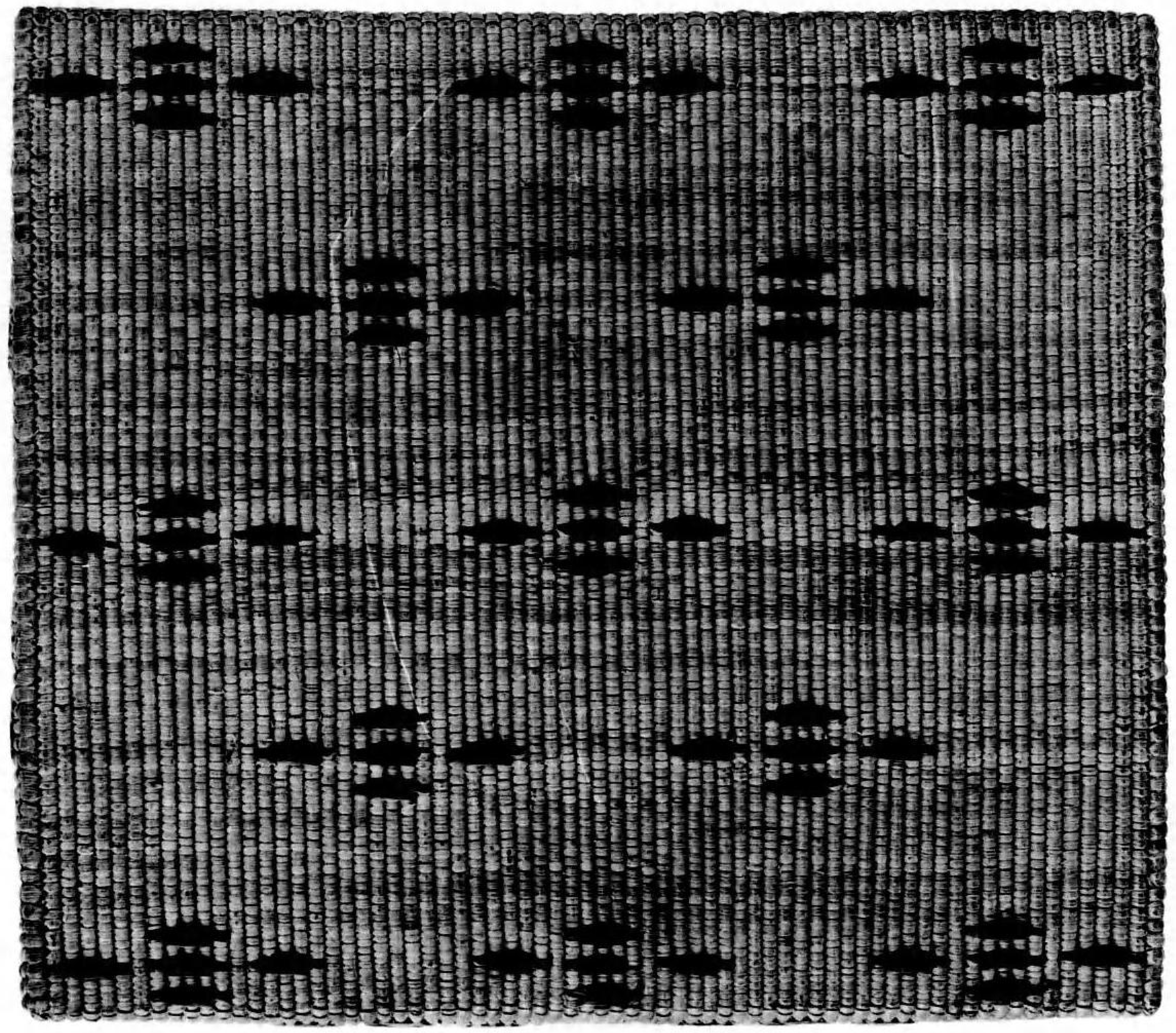
第二十七圖　白葛筥三合の一（一）　（約原寸）

蓋　竪二〇糎七　横一八糎六　高七糎一

身　竪一九糎五　横一七糎五　高七糎六

白葛を編んで造つたもので、其の表面には蘇芳染並墨染の葛で花菱形をあらはし、編み止めには白楊を纒はしめて縁を作る。上圖は其の全形、下圖は色彩の殊に鮮明な底裏を示す。

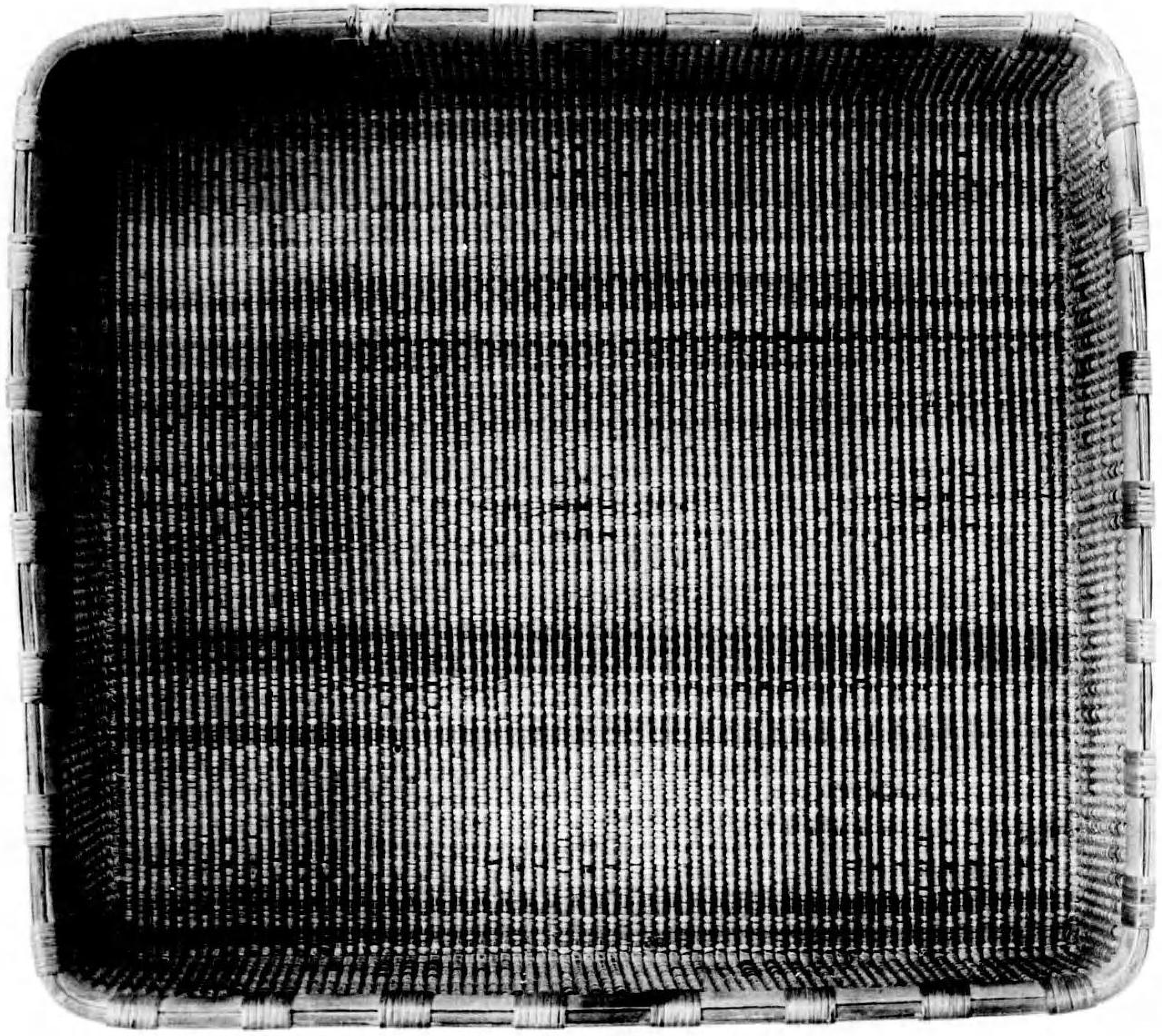




第二十八圖　白葛筥三合の一（二）　（上縮寫四分ノ三、下原寸）

葛筥の內には白麻紙を心とし淡紅色紙を表にした襯（うちばり）を入れてゐる。上圖は蓋を開いて其の襯の一部を覗かしむ。

下圖は當代葛筥の技法を見るべく特に蓋裏を原寸であらはした。表面に花菱形の文樣の編み出されてゐるに拘らず、裏面が一樣の平編みである事は、織物の場合とよほど異つてゐる。

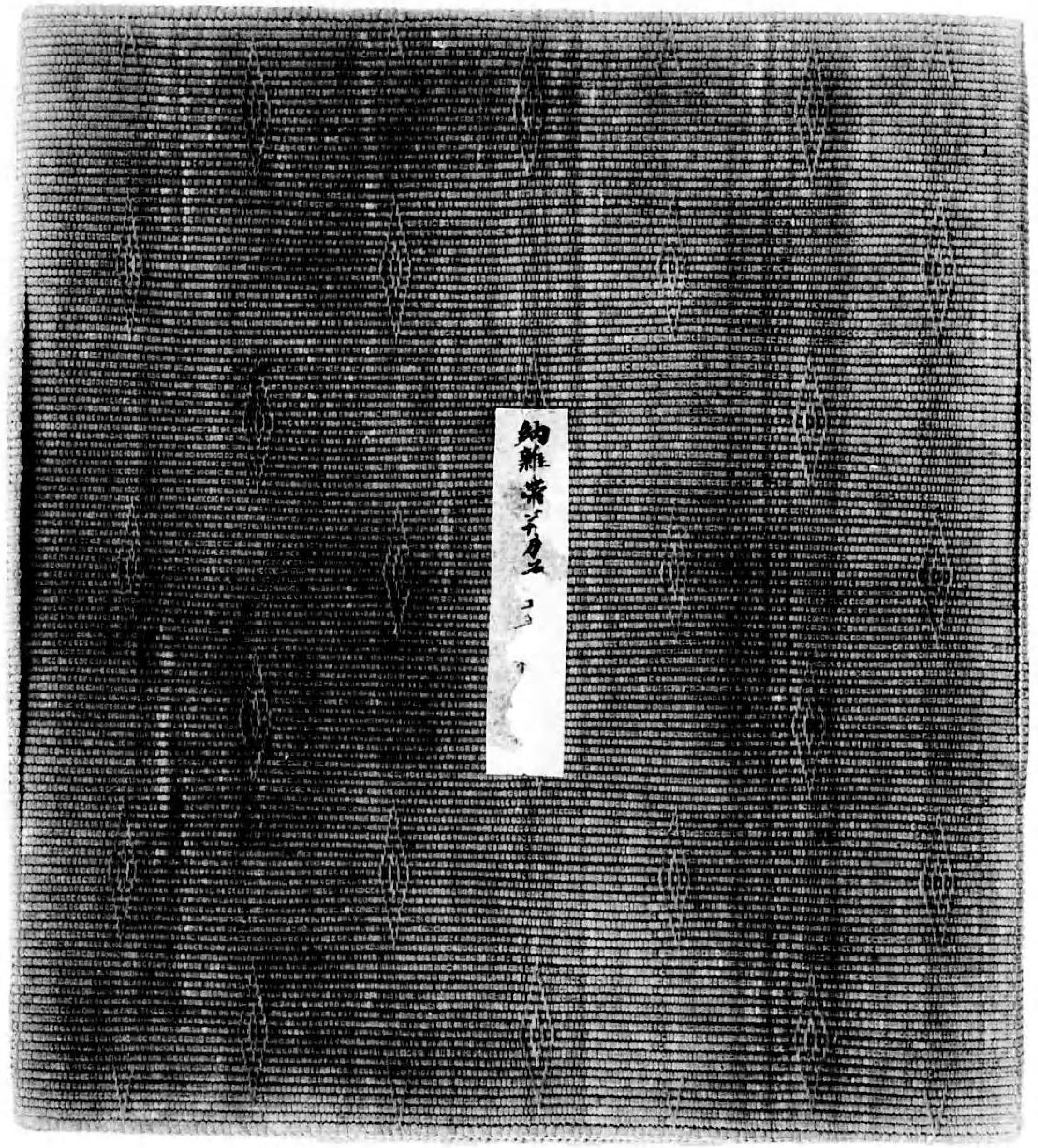


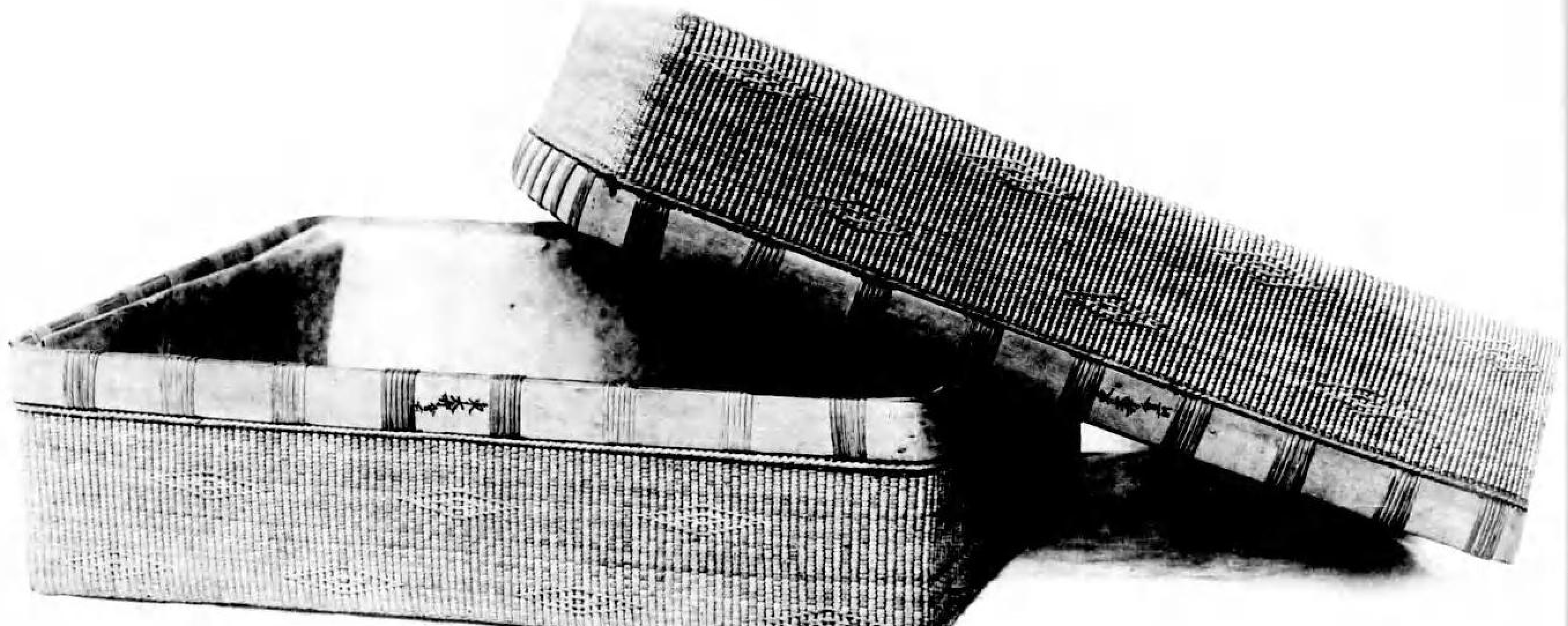
第二十九圖　白葛筥三合の二　（上縮寫五分ノ三、下約二分ノ一）

蓋　竪三六糎　横三二糎　高八糎五

身　竪三四糎五　横三〇糎五　高九糎五

製作技法は前掲白葛筥と全く同じである。只彼の色染葛を以つて表面の文様を作るかはりに、これは同色葛で文様を浮かせて居り、前者の文様の花菱であるに對し、これは二重菱をあらはしてゐる。筥内には白麻紙を心とする紫褐色の襯があり、又蓋表には「納雜帶幷刀子□」の貼紙、蓋及身の楊緣には各「東大寺會前」の墨書がある。



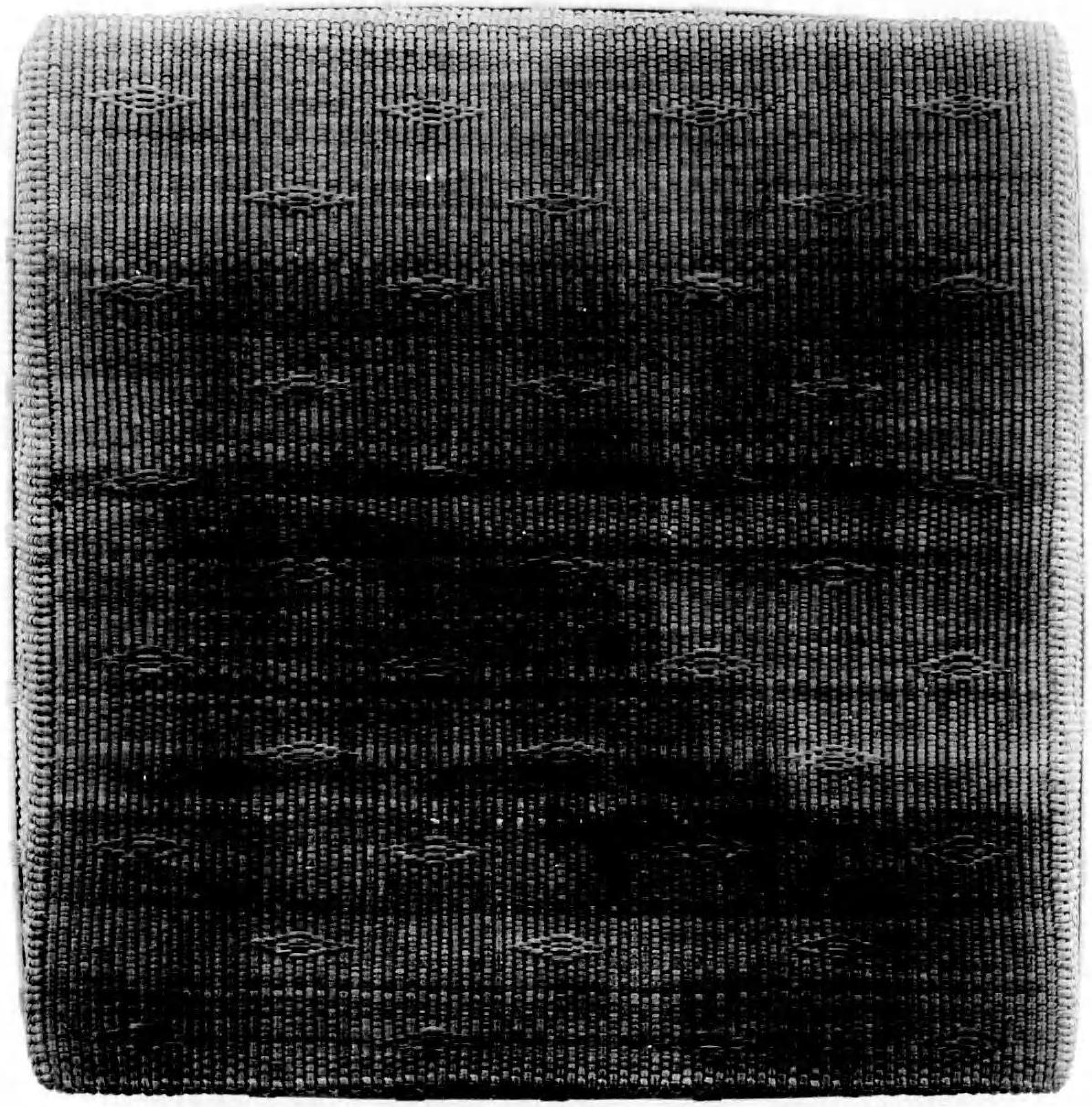


第三十圖　白葛筥三合の三　（上縮寫三分ノ二、下約二分ノ一）

蓋　竪三四糎二　幅三五糎七　高五糎

身　竪三三糎　幅三四糎五　高五糎三

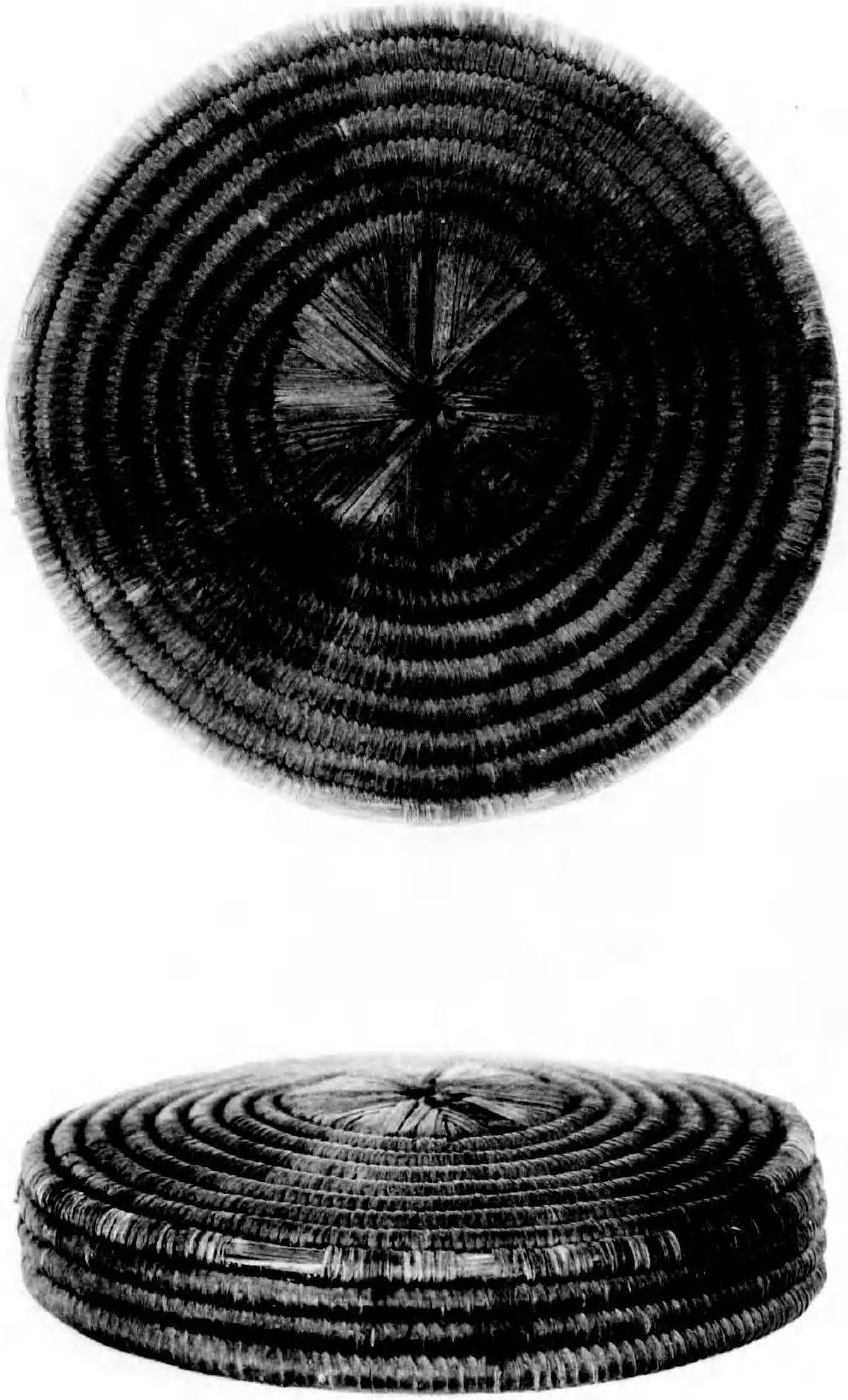
表面の菱形文樣が多少變化してゐるだけで、構造編方は前二者と全く同じである。これには紙の襯は無く、蓋及身の楊緣にそれぐ〳〵「東大寺花筥」の墨書が殘る。



第三十一圖　斑藺筥蓋（一）　（原寸）

徑一七糎二　高二糎九

丸藺を束ねて心となし、之を渦旋狀に導きつゝ中央より次第に編み進めたもので、其の編み方は今の飯櫃盒の製作と甚だよく似てゐる。編藺には白藺・蘇芳染藺・黃染藺とを混ぜ用ひ、放射形の文樣を作つてゐるが、外氣に對する面は退色甚しい。圖上は其の上面、下は側面。



第三十二圖　斑藺筥蓋（二）　（原寸）

蓋裏を示す。蓋裏には編藺の色彩尙ほ鮮に殘り、圖中比較的黑く見えるは蘇芳染藺、最も明るく見えるは白藺共の中間色に見えるは黃染藺の部分である。

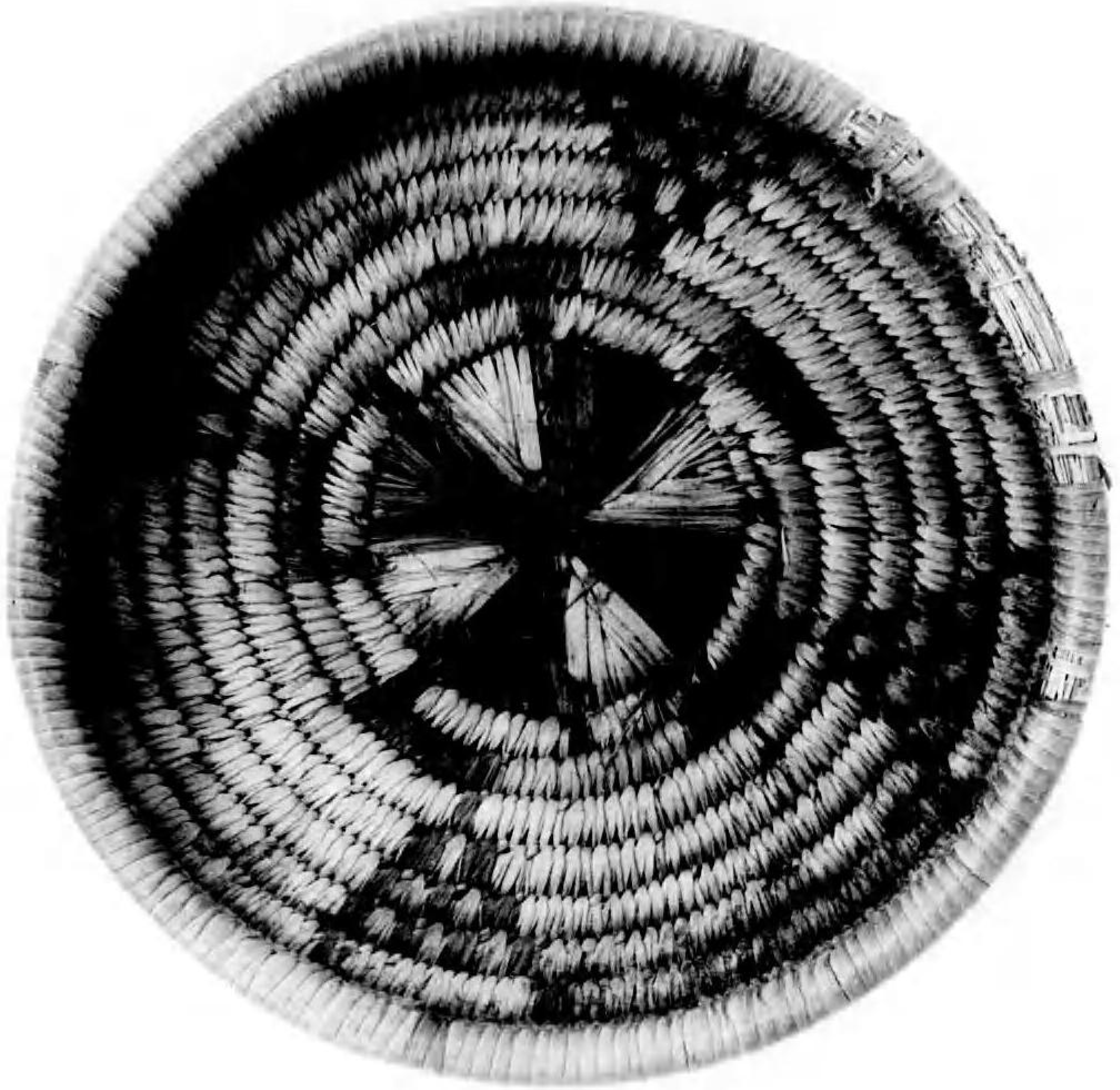
因にこの斑藺筥は蓋のみ現存して身は失はれてゐる。

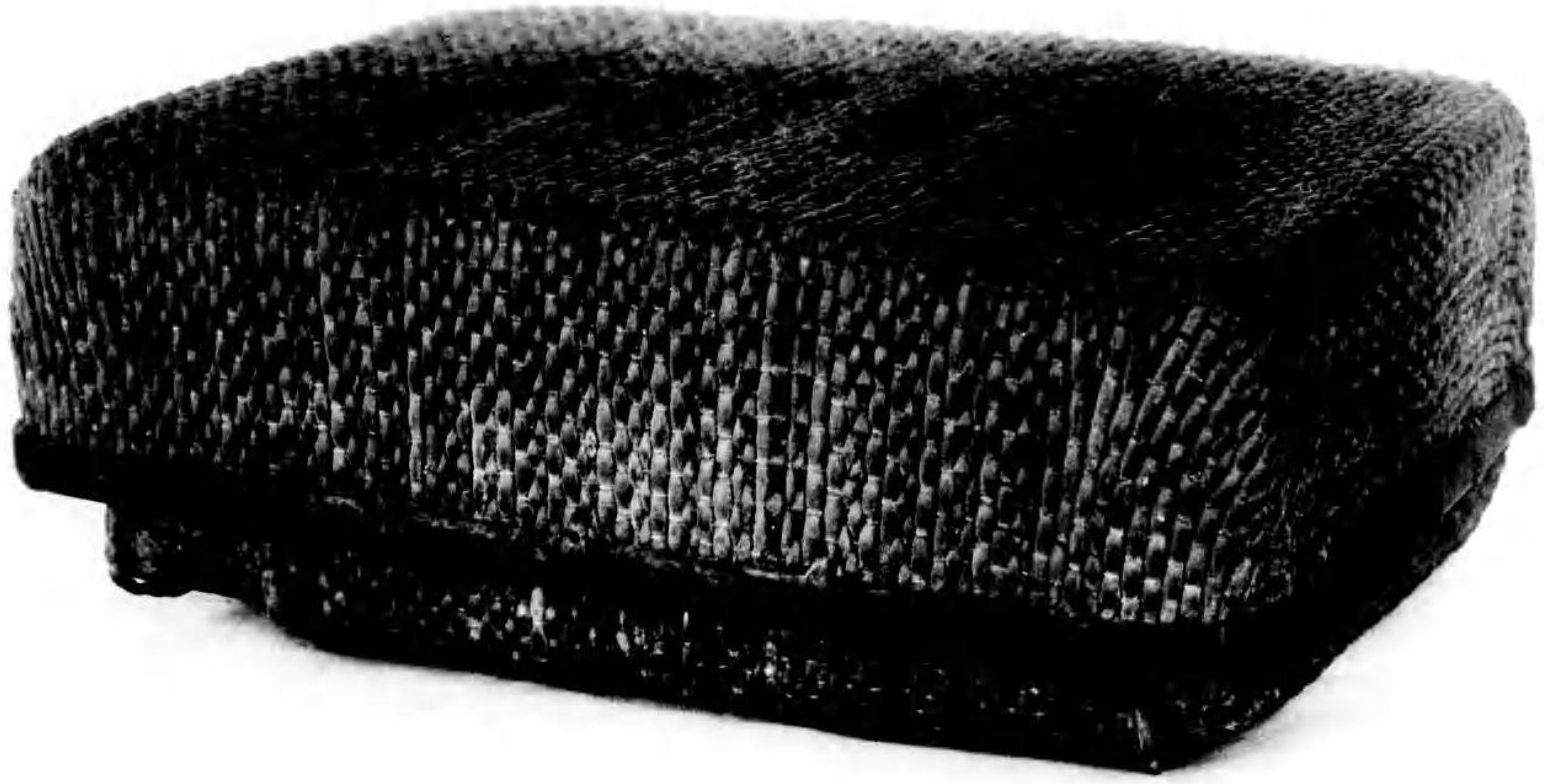
柳　箱（一）　（約原寸）

蓋　竪二〇糎三　橫一四糎　高五糎二

身　竪一九糎　橫一三糎五　高六糎七

編み方は今の柳行李と同樣で、皮を去つた細楊を平行に竝べ、麻糸を經として編んだもので、その編み留めには、楊の枝を纒ひ楊皮で結つて緣となして黑漆を塗つてゐる。

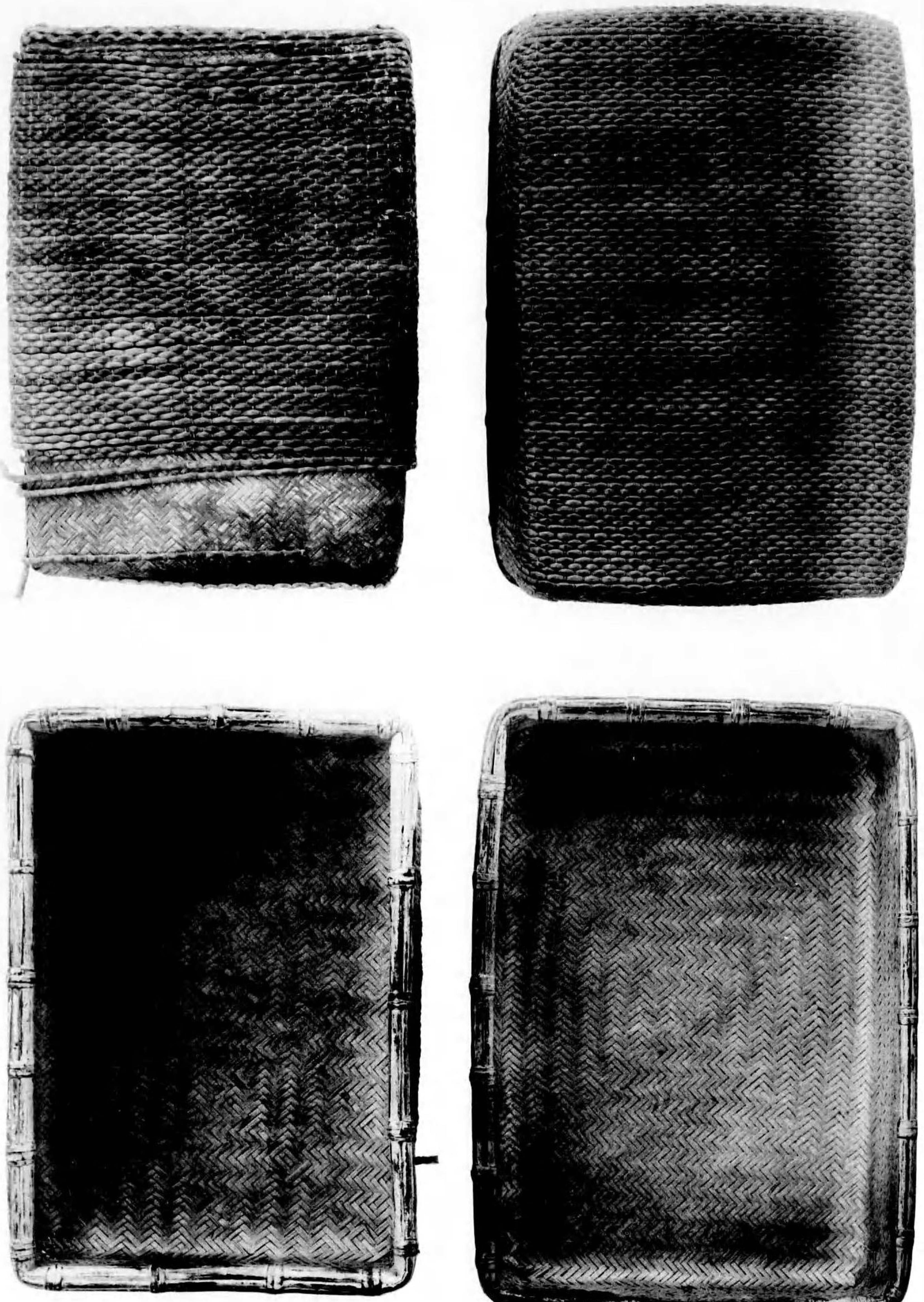




第三十三圖　柳　箱（二）（縮寫五分ノ四）

前掲柳箱の蓋と身との表裡を示す。身蓋とも其の内面に柳を網代に組んだものを入れて二重となし、今の柳行李の製作よりも更に入念の仕事がしてある。内面の網代の組方を蓋と身と異にしてあるのも面白い。

尚此箱には何故か其の内外にわたつて銀粉が多く附着してゐる。



第三十三圖　櫃　甲（二）

[illegible]

第三十四圖　漆皮箱二合の一（上）

（縮寫七分ノ三）

蓋　竪四三糎五　横三四糎　高九糎二

身　竪四二糎　横三二糎七　高九糎七

長方形の箱で、蓋身とも僅かに面を取る。其の製作は牛皮を心とし縁に栲布を貼し全面黒漆塗したものらしい。蓋表には白紙を貼り墨書して「寺入」とある。

（原　寸）

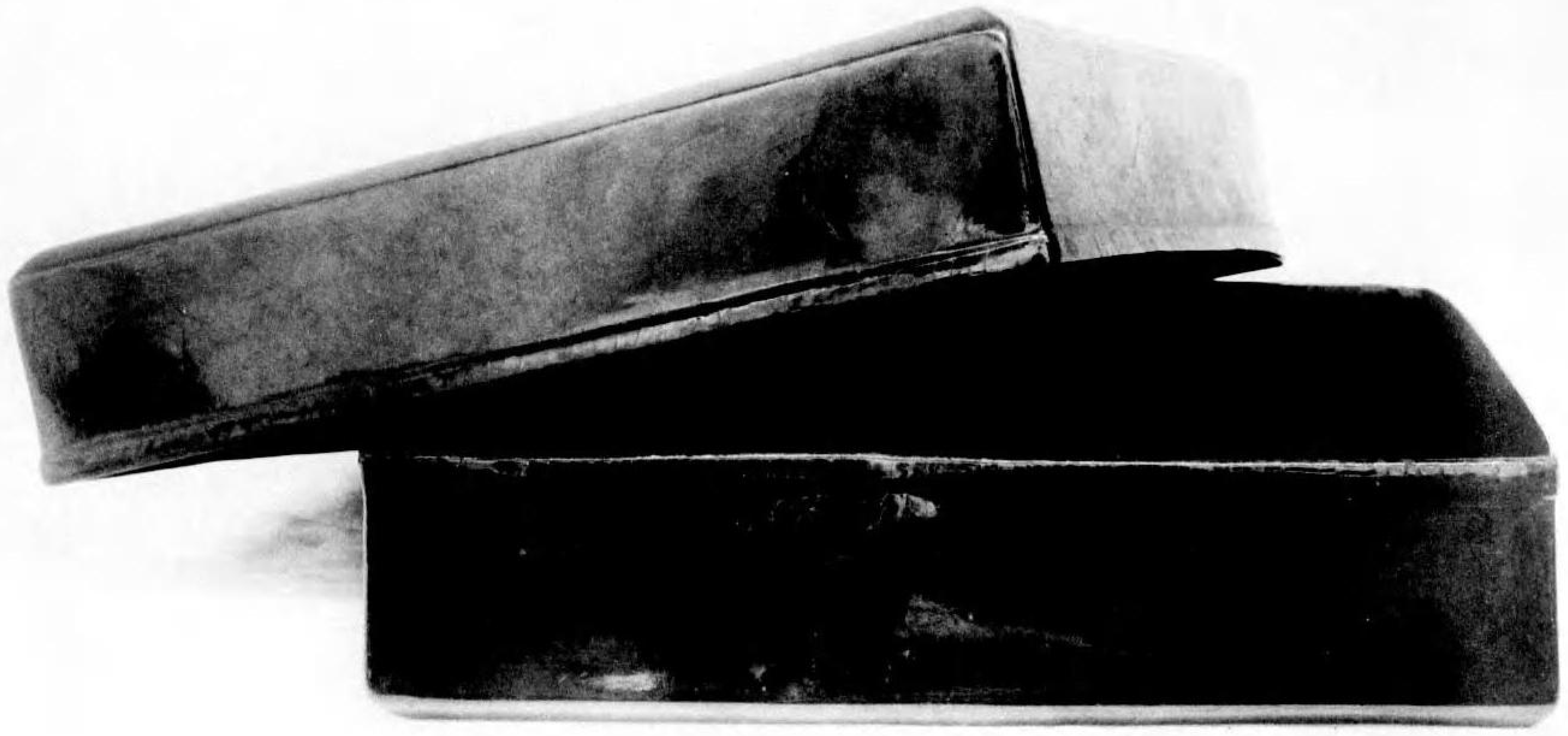
漆皮箱二合の二（下）

（縮寫三分ノ二）

蓋　竪二三糎八　横二二糎五　高四糎三

身　竪二三糎　横二一糎五　高四糎五

ほゞ正方形をなし、蓋身とも僅かに面を取る。製作は大體前者に同じ。



漆皮箱二合の一　下

第三十四圖　漆皮箱二合の一（上）

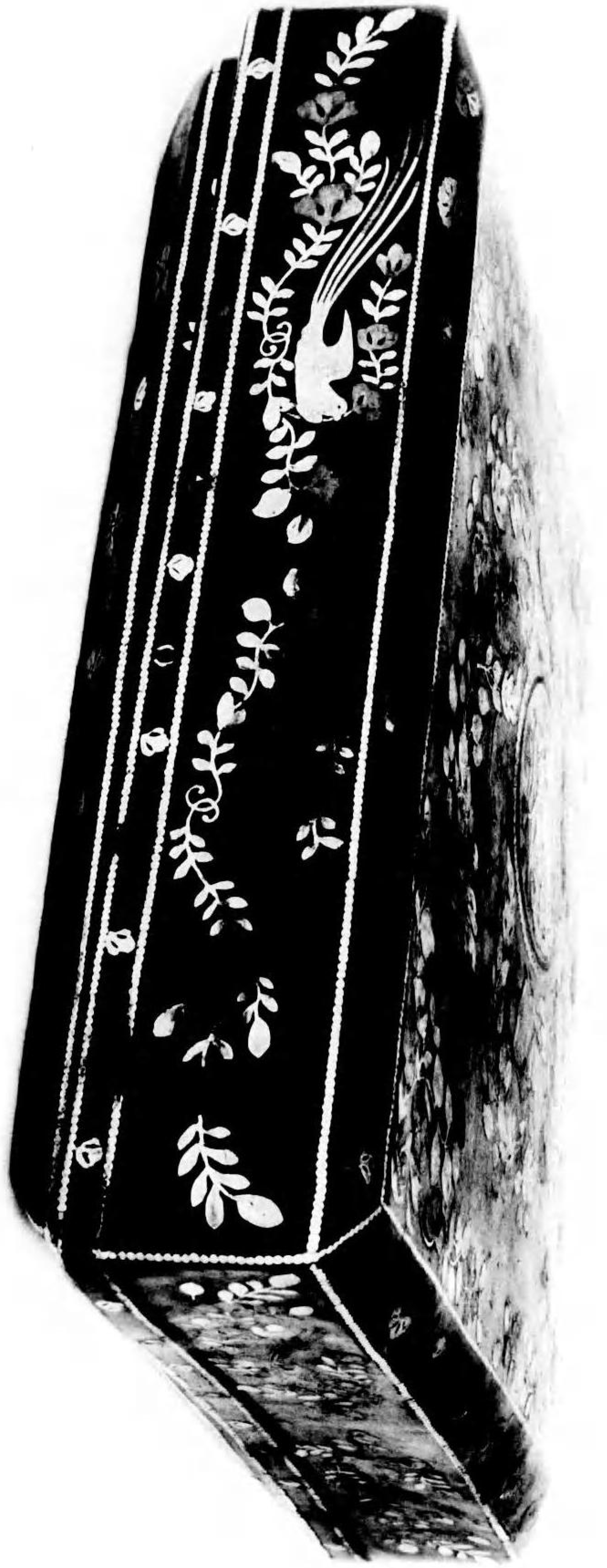
第三十五圖　金銀平脫漆皮箱二合の一（一）

（縮寫約五分ノ四）

蓋　竪二七糎　横三三糎　高六糎三

身　竪二五糎　横三一糎五　高七糎五

漆皮箱の蓋表並側面と身の側面に渉つて、金銀平脫で種々の文樣をあらはしたもので、北倉銀平脫の漆胡瓶と共に平脫應用の代表的遺品である。箱は長方形をなして蓋身ともに面を取り、稜に隨つて連珠形の界線を作り界内に金銀の文樣を配し、内部には厚麻紙の心に橡紙を被せた襯を入る。



第三十六圖　金銀平脱漆皮箱二合の一(二)

(縮寫五分ノ四)

前掲金銀平脱漆皮箱の蓋表を示す。中央に飛翔する鳳凰は金、其周圍の連珠圈と飛雲とは銀、同じく連珠の外圈は金、之を繞ぐる六雙の遊禽は銀、鳥の啣へる花枝は金、花は銀、取面の界をなす連珠線は金、界内の花文は上瓣を金にし下瓣を銀にするものと、上瓣を銀にし下瓣を金にするものとを交互に配してゐる。

第三十七圖　金銀平脫漆皮箱二合の一（三）　（縮寫五分ノ四）

身の側面と底裏とを出す。側面に表はされた尾長鳥と花は銀、花枝は金、又上部界線內に配された木葉形は金と銀とが交互に置かれてゐる。下部取面にある花形は蓋の取面中のものと同樣である。

第三十八圖　金銀平脱漆皮箱二合の二(一)

（縮寫約三分ノ二）

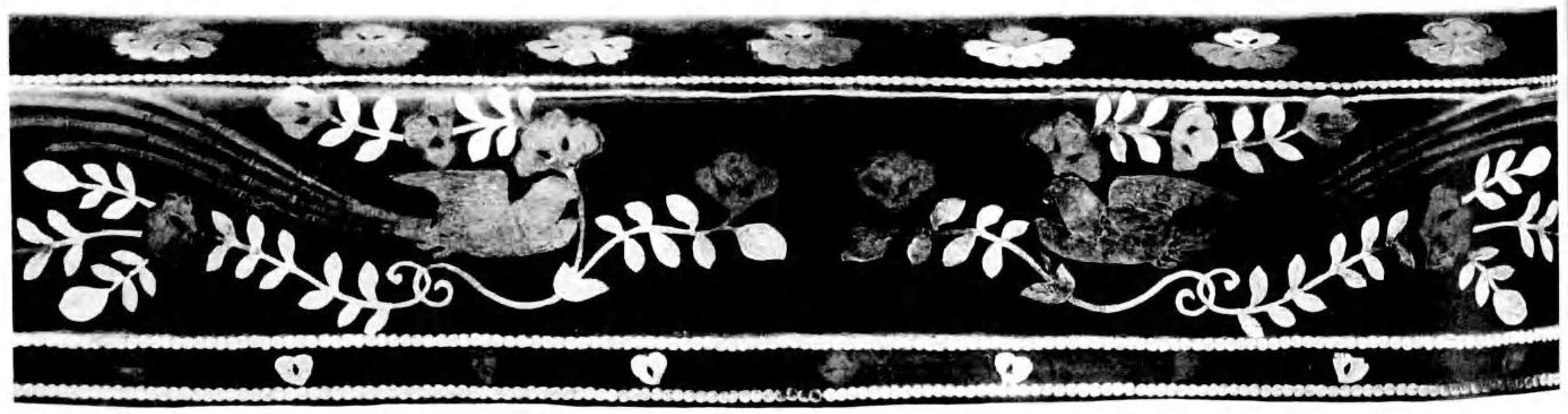
蓋　竪二七糎　横三三糎　高六糎三
身　竪二五糎　横三一糎五　高七糎五

大さ・文様・製作・手法等前者と殆んど同じだが、蓋並身の口緣、界線内に配された文様には兩者に截然たる區別が見られる。

箱の内部には前者と同樣白橡麻紙の覗が残る。

第三十九圖　金銀平脫漆皮箱二合の二(二)　（原寸）

蓋表と蓋側面との文様の一部を原寸大に出す。鳥の羽毛、花の纖維、葉脈等をそれぞ〵細かに毛彫してゐる。



第三十五圖

第四十圖　密陀繪漆皮箱（一）（上約原寸、下縮寫十分ノ九）

蓋　一邊長二三糎六　高四糎一
身　一邊長二二糎九　高四糎二

正方形被蓋の箱で蓋身ともに面を取る。蓋の一部破損せる箇所に就いて觀察するに、皮の上に更に二重の麻布を被せて黒漆を塗り、之に赤密陀もて文様を描いたものゝ樣である。箱の内には硯がある。硯は紫紙を心として縁に細き竹を入れ底に綿を敷いて、之を絁で包んだものであるが、朽損甚だしい。

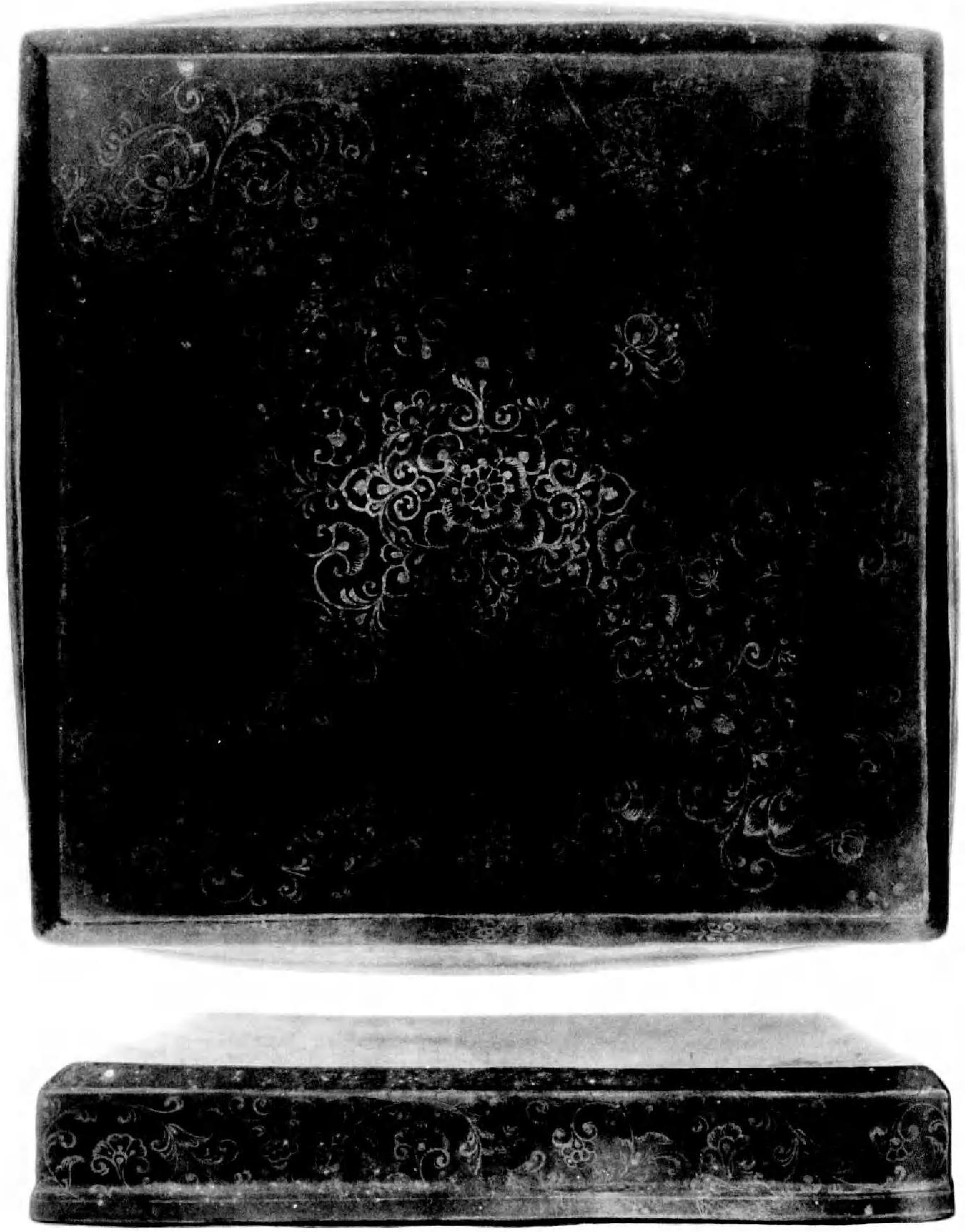
圖版の上は側面、下は蓋をとつて硯を見せる。

第四十圖　密陀繪彩漆箱（一）

[illegible]

第四十一圖　密陀繪漆皮箱（二）　（原　寸）

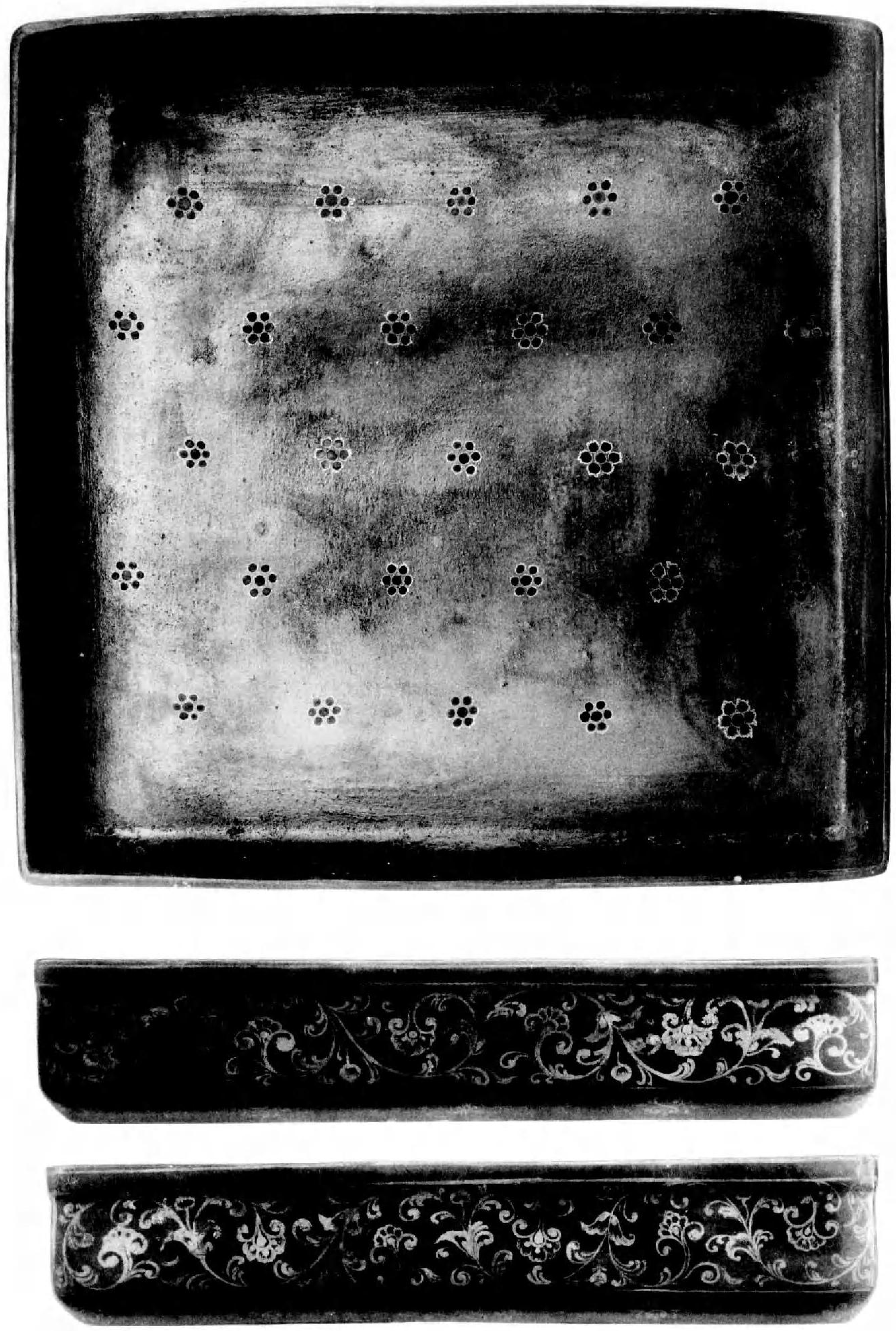
蓋表と共の側面とを示す。蓋表には赤密陀で大業文を描き、取面には同じく忍冬唐草の飛文を、側面には扁行する唐草文を表はす。然し是等の文様は赤密陀が焼けて銀色を呈するところが寧ろ多い。圖版中文様の白く鮮かに出てゐるのは、銀色に變化した部分である。



第四十二圖　密陀繪漆皮箱(三)　（原　寸）

上圖は身の內面を示し、下圖は其の側面を表はす。外面の黑漆塗りであるに似ず內面は全部赤密陀で塗られ、その上に銀で七曜形の小花文が散らされてある。花文の銀は多く黑色に變じてゐるが、其の周圍には尙白銀の結晶が見られる。かく赤密陀塗りの上に銀の花文を散らす事は蓋の內面も同樣である。

身側面には蓋と同樣同種の唐草を描く。而して此の唐草に於いて直角に隣る二邊の唐草が互に方向を異にしてゐるは、稍注目に値する。尙此の箱にあつては、身の底にも蓋表と同樣の大寞文を作つてゐる。而もそれは直接外氣に觸れぬ爲か文樣殊に鮮かである。



第四十三圖　沈香木畫水精莊箱（一）

（約原寸）

竪三三糎　橫一二糎　高八糎八五

數ある獻物箱の中最も善美なものと云へやう。全面沈香と紫檀とで張り、沈香張りの上には更に金泥で諸種の文樣を作り、又所々に水精板を嵌して其の下に彩繪を伏せ、稜と緣とには緻密な木畫を嵌め、床脚には象牙で蔓草の漏空彫を施す。且つ内面黒柿蘇芳染の板にも金泥で木理を描く等、最も裝飾に意を用ひてゐる。

第四十四圖　沈香木畫水精莊箱（二）

（原　寸）

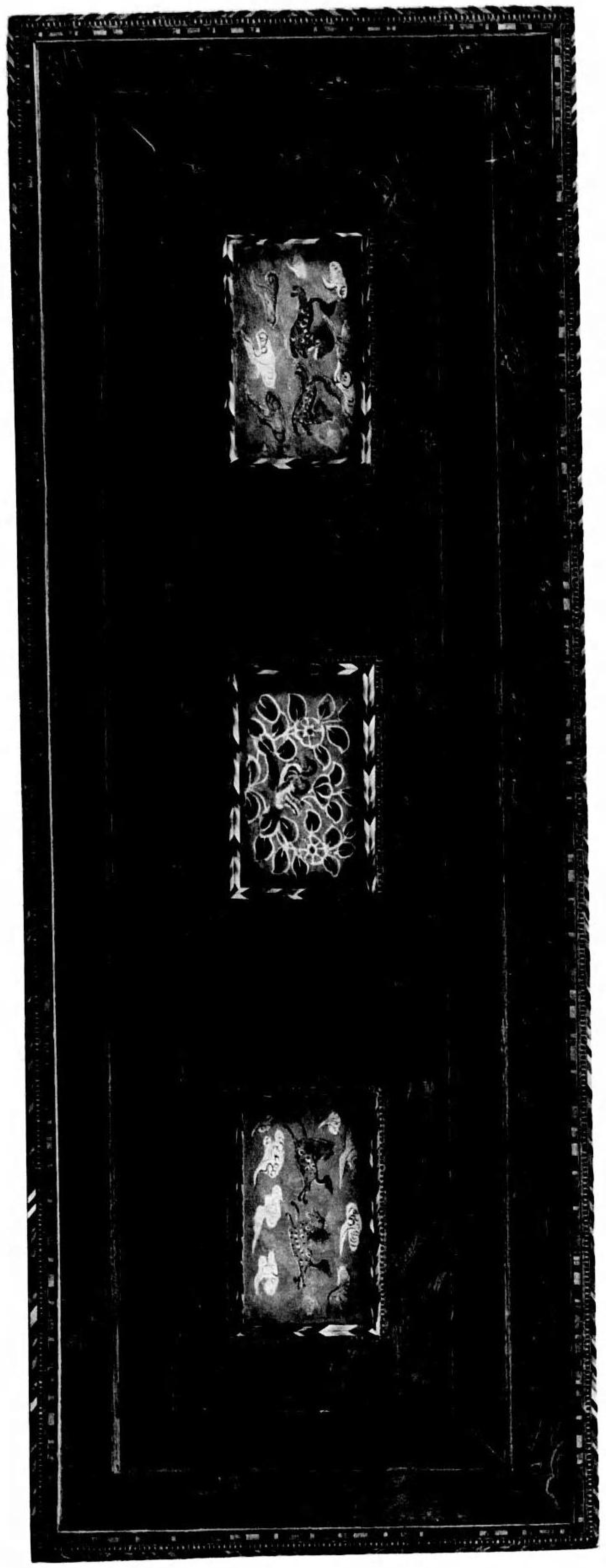
前掲沈香木畫箱の兩側面と背面とを出す。水精板嵌込みの彩繪は、兩側面に於いて紫地に花卉胡蝶の圖、正背面に於いては、中央は朱地に花卉双鳥の圖、兩端は綠地に山岳双鹿の圖を作る。然し是等を熟視するに、其の圖様に於いても色調に於いても、そこには常に劃一で無い均正がある。それは沈香張に施されてゐる金泥の山水文様に於いても同様に云へる。

次に床脚に施された象牙漏空彫を見るに、其の葡萄唐草文には獅子があり鳥があつて所謂怪獸葡萄鏡の外區文様に共通する點の多いのに氣づく。

第四十五圖　沈香木畫水精莊箱（三）

（原　寸）

箱の蓋表を現はす。中央三個の水精板嵌めを繞つて金泥で木理が描かれてあるは沈香張りの部分、其の周に紫褐色の帶狀をなすは紫檀張りの部分、更に其の外區をなして金泥の木理を作るは又沈香張りの部分、而して其の周縁と水精板の縁に矢羽根形をなすは木畫の箇所である。



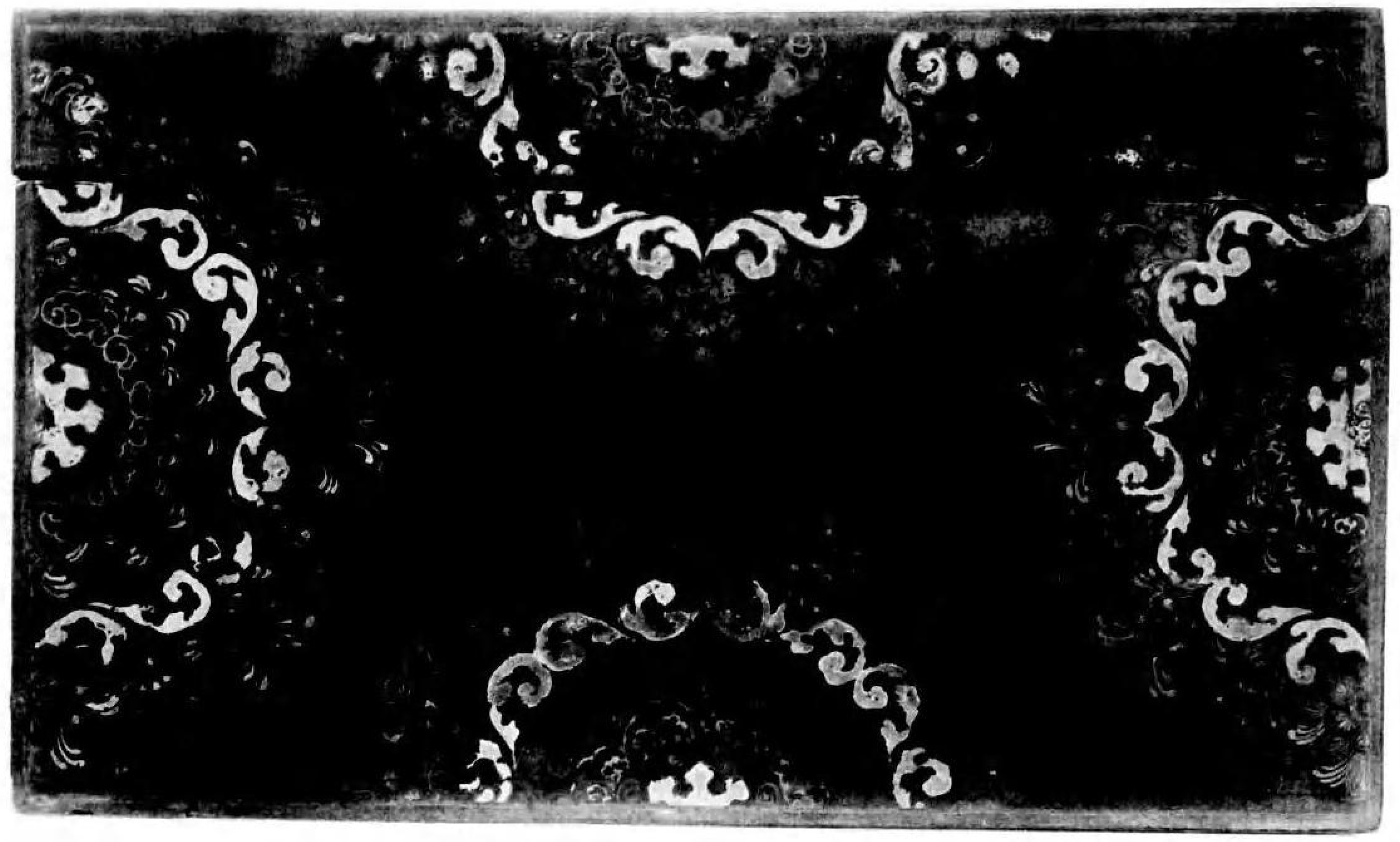
第四十六圖　密陀彩繪箱三合の一（一）（上縮寫五分ノ三、下約二分ノ一）

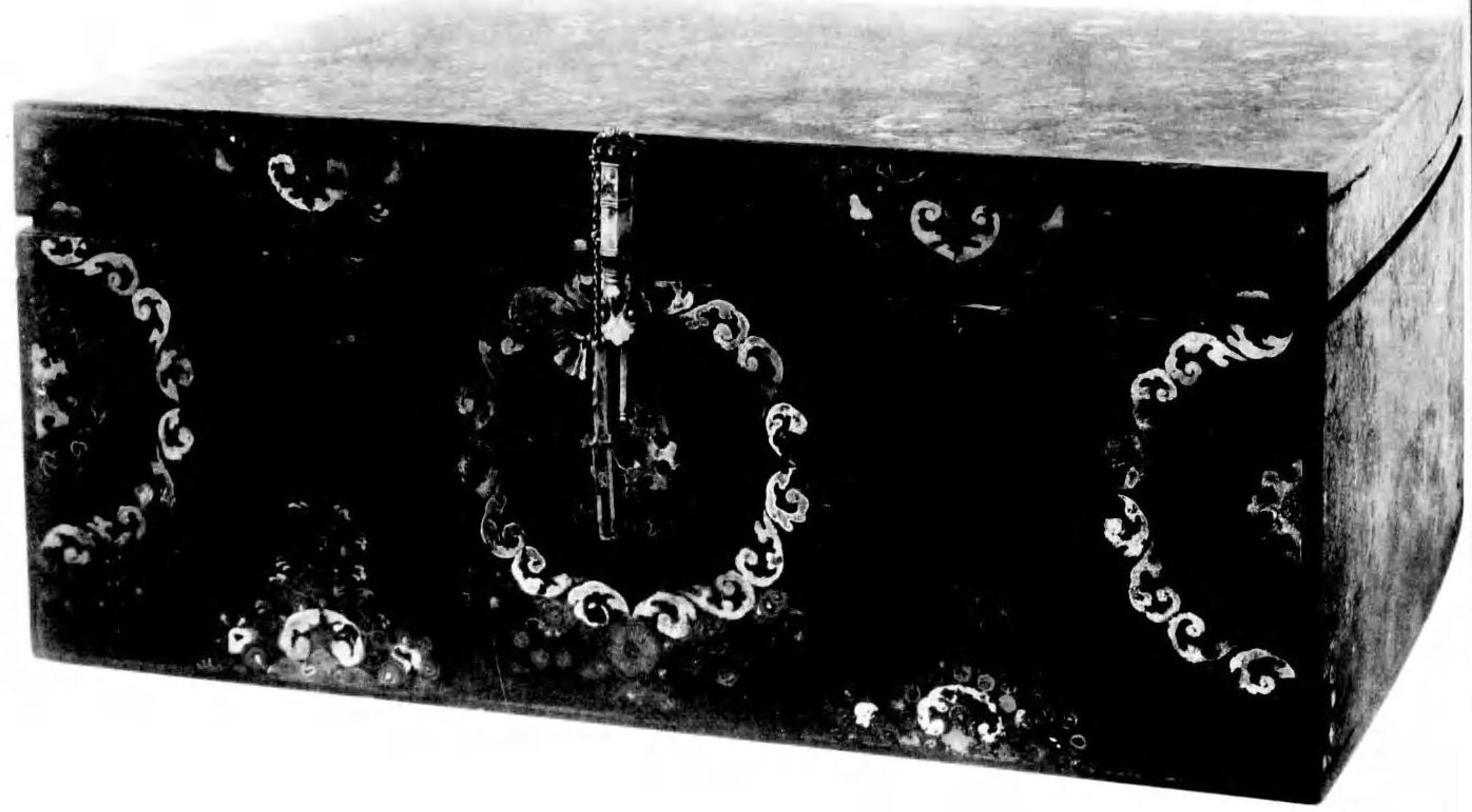
竪四三糎八　横三二糎　總高一九糎

木製黒漆塗印籠蓋の箱で、正面には金銅の海老錠をつけ、背面には一双の金銅肘金具と壺金具とを設けて開閉の便に備へてゐる。密陀彩畫はこれが上・兩側・正・背の五面に渉つて施され、二種の窠文を交錯して描く。

圖版上は箱の側面、下は斜面を示す。

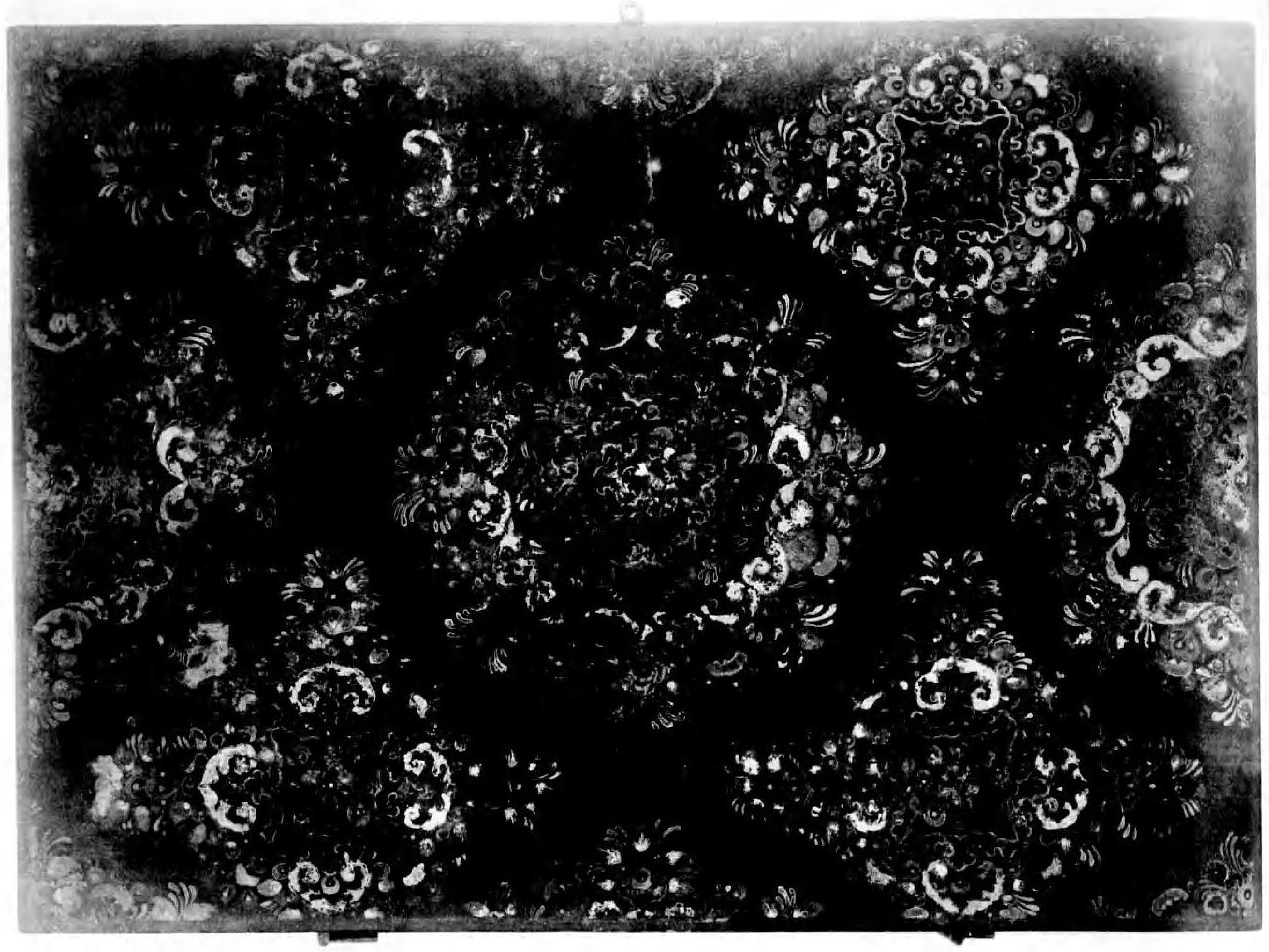
金銅鏁子（原寸）





第四十七圖　密陀彩繪箱三合の一（二）　（縮寫五分ノ三）

前揭密陀彩繪箱の上面と背面とを出す。圓形窠文と菱形窠文とを交錯配置した錦織によく見る圖柄で色彩には赤・黃・綠・茶・並金箔とが案配されてゐる。



第四十八圖　密陀彩繪箱三合の二（一）

（縮寫五分ノ三）

竪四五糎　横三〇糎　總高二一糎四

木製黒漆塗印籠蓋の箱で、蓋は僅かに面を取り、其の表には白と赤との密陀で、廻旋する忍冬文と靈鳥とを描く。蓋表中央に貼紙して「納丁香青木香 會前東大寺」とあるは、以つて此の器が天平の當時香箱として使用された事を察せしめる。箱の内部が縦の界により二區に劃せられ、それ〴〵に白絁の嚫を存するは丁香と青木香とが、その中に分納されてゐたものと思はれる。

箱内面